

舵取り奮闘記

①

内田信也物語

〈新連載〉 宮本しげる

「序・生い立ち」

内田信也（のぶや）は明治十三年、茨城県麻生町に生まれた。西南の役で西郷隆盛が自刃、大久保利通の暗殺など激動の時代が終ろうとしていた。海運界は、新政府の保護で繁栄した三菱会社に対抗し、三井の益田孝や沢栄一による東京風帆船会社が設立された。後年、内田信也が勤める三井物産は明治九年、帆船経営に乗出し、三池炭の上海積出し、物産取扱いの内地沿岸輸送を始めた。

この近代海運勃興期に誕生した内田信也

は、大正の大戦景気で山下亀三郎、勝田銀次郎と並ぶ三大船成金として名をほせた。その後、戦後不況を予見、政界へ転じ有力大臣として国家の舵取りに参画した。

——内田の父寛は外様大名・麻生藩の武士だった。藩主新庄直好は將軍徳川家光に焼きワカサギを献上した所、大好評で御公儀の魚「公魚」と表示するようになった。信也は霞ヶ浦に浮かぶ帆引き船を見て育った。六歳の時、一家は東京に移住することになり、天

王崎より舟に乗り利根川を通行、江戸川を下って東京灣に入った。一家は一時小石川に居を構えたが、やがて芝区へ移った。信也は浜松町の桜田小学校へ通った。優等生ではなかったが、算術はいつ

育はユニークだった。最初百点を与えて、悪いことをすると減点した。信也は入学した日に、寒いと言って椅子を壊してストーブに放り込み八点引かれた。「我校は悪を善に導く、俊才ばかりの府立中学は真の教育じゃない」と言う校長のポリシーに感動した。

貧乏士族の内田家は、長男誠太郎と末子信也以外の兄弟は養子に出された。四男四郎は十四歳で山口県郷土窪田繁の養子になった。明治二十九年、東京高等商業（現・一橋大学）を卒業、三井物産に入社した。信也も父の勧めで東京高商を受験することになった。同校は一高、海軍兵学校と共に競争率の高い学校だった。四郎は「猛勉強しないと絶対に受からないぞ」と

発破をかけた。トタン信也は別人のようになり、勉強に集中して東京高商に合格した。矢野二郎校長は、昔、第二回遣欧使節に益田孝と共に随行、帰国後、貿易発達のためには専門の教育機関が必要と、高商の前身である商法講習所を創設した。

四郎は、矢野校長の薫陶を受け、高弟として私邸に出入りした。一方でイケメンの彼は（オールを持つ手に花が散る……）と唄われた墨田川ボートレースのチャンピオンとして都の子女の血を沸かしたという。

矢野校長は優秀な弟子を三井物産に入れた。物産の益田社長の子は、矢野校長の妹で絶世の美女だった。

◇ ◇

舵取り奮闘記

(2)

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「東京高商の舵取り」

矢野校長は、信也など若者を麻布広尾町の私邸に集め、福沢諭吉の「若い時は老人に接し、年を取ったら若人に交われ」という訓話を聞かせた。要するに「実物教育」である。

ある日、校長は応接間に置いている葉巻を信也らに進めた。学生らは一本取って火をつけたが、食事になったので火を消して食卓についた。食後、吸いかけの葉巻に再び火をつけて吸おうとすると「バカ野郎、そんなケチな料簡でお前たちは大成できるか」と一喝

された。また信也は突

然、校長に日本橋へ行って煮豆を買って来いと頼まれた。歩いて行くのは大変と不承不承「はい」と返事すると、校長は二頭立てのホロ馬車を用意させた。信也はトタン得意

になって日本橋まで豆を買いに行った。これは校長の(当時日本人が外国へ行って立派な馬車などを見ても委縮せぬように)との思いからであった。

私邸には沢沢栄一や益田孝という大物が訪れ、金ポタンも一緒に食事をした。これも校

長の活きた教育だった。信也が感激したのは、台湾民政長官・後藤新平が来訪した時の事である。学生と面談

中の校長が「教育者として大事なのは金ポタンだ。お前のような既成品には用がない。客との話が済んだら会うから、待つなら待って」と言う、後藤は何も言わず部屋の中をウロウロしていた。信也は後藤もさすがの人物と思った。……後

年、後藤新平は関門トンネルを立案した。その後、信也は鉄道大臣として予算を通し海底

トンネルに着工したという縁がある。

兄の四郎が三井物産で香港、上海など各支

店勤務を経て米国で修業し、遂に漢口支店長になった頃、信也は柔道、レガッタに夢中だった。ポート部主将の彼は「舵取り」として漕手に細かな指示を出した。人の上に立ち、人を纏めるという才覚

は、この頃芽生えたのである。在学中は学科の記憶力試験は意味がないと小バカに

し、創造力こそ尊い、と、ろくに勉強をしなかった。そのため落第の憂き目に遭い、四郎にしこたま油を絞られた。それでも明治三十八年、ビリで卒業したが、すでに二十五歳になっていた。矢野校長は「この男は偉くなればとても偉くなり、一旦ハグれると、どうな

るか分からぬ」と、他人に洩らしていたが、三井物産への就職を斡旋した。

四郎は信也に「就職試験とは頭の先から足の先まで全部検査されるんだ。お前みたいに汚い奴は一遍に落とされるので奇麗に身支度をしなさい。歯なんか真黒ではないか」と注意した。信也は一生懸命に歯を磨いたが不断磨いていないので中々白くならない。その

内、口の中が血だらけになって、遂に銀座の歯医者で磨いてもらって試験場に行った。

その頃、四郎は益田社長の指令で、堺セルロイドの専務に就任した。だが、これを皮切りに北海道炭鉱汽船、富士製紙、日魯漁業等の重役として数社を転々とするのである。

◇

舵取り奮闘記

③

内田信也物語

〈連載〉 宮本しげる

「三井物産へ入社」

信也は矢野校長の言う通り一風変わった才幹を持っていた。入社時のエピソードが振るっていた。並の男なら卒業証書をもらって郷里に錦を飾り、悠々と会社によって来るが、信也は証書を握るとその足で本社へ向かった。「君は神戸の船舶部に決まっている。神戸で入社の手続きをしないさい」と係りの者が言った。「いや自分は三井物産社員になったのだから今から本社で働きます」とそのまま居据わった。この押し問答が上役に聞こえ、

信也は矢野校長の言う通り一風変わった才幹を持っていた。入社時のエピソードが振るっていた。並の男なら卒業証書をもらって郷里に錦を飾り、悠々と会社によって来るが、信也は証書を握るとその足で本社へ向かった。「君は神戸の船舶部に決まっている。神戸で入社の手続きをしないさい」と係りの者が言った。「いや自分は三井物産社員になったのだから今から本社で働きます」とそのまま居据わった。この押し問答が上役に聞こえ、

本社に勤務することになった。卒業生の三分の一が物産に入社したが、同期の新入社員は一ヶ月後に出勤し、信也の後塵を拝することになった。(先んずれば人を制す) ポート部の舵取りは、実社会でも同僚を一艇身抜いたのである。

信也が赴任した神戸は近代産業の槌音高く、三菱が神戸造船所、鈴木商店が神戸製鋼所を立上げ、新開地には多くの庶民がくり出した。俳人子規は明治十六年、神戸に旅し「先づ海岸に出で洋館

三井船舶部は明治三十六年に発足したが、最初は社員十名ほどで、もっぱら三井鉱山の石炭を運んだ。信也が入社した明治三十八年は日露戦争で勝利した年である。三井物産も戦争に協力した。漢口支店長をしていた兄四郎の部下に森格(つとむ)という社員がい

た。上海支店時代、支店長の山本条太郎は右炭荷役監督の合間に英語の勉強をしている森を見て「この男は俺の修業時代と同じだ」と気にかけていた。

時は日露戦争の終盤でバルチック艦隊を迎え撃たんと意気大いに揚がっていた。ある日、当直の森は物産本店からの暗号電報を受け取った。「上海の解船を全部チャーターせよ」との電文だった。森はこの使命に上海中を駆け巡り完璧に仕事をやり遂げた。結果、七ヶ月の長旅に疲れたバルチック艦隊は上海で休息をとる暇なくウラジオストクに向けて航海を続けた。所がベトナム安南沿岸を出港して以来、敵艦隊の消息が途絶えた。山本は取引先や外国船などに艦隊の行方を聞きまくったが分らない。そこで日頃目をかけている森に、艦隊の航跡を探させよと命じた。彼は直ちに数名の部下と一艘のヨットに乗り組み南シナ海へと出航した。暫く連絡が無かったが一週間目にやっと電報を見た山本は「奴さんやっとなる、さすが森だ」と絶賛した。森は厦門、香港、澎湖島、マニラと航走し遂に航跡を突き止め、艦隊がバシー海峡通過後、密かに尾行し逐一上海に打電した。山本は刻々の状況を連合艦隊司令部に転電した。森はその後、政界に身を転じ、満州事変に係わるが、昭和七年、五十歳の若き生涯を閉じた。三歳年上の信也は「政友会」で共に闘ったが、馬が合わずいつも反目していた。

◇

舵取り奮闘記

⑤

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「海運業を立ち上げる」

シンガポール赴任の話が出て、信也は川村部長や人事課長の藤村義朗の勧めで、室蘭の日本製鋼へ転替することにした。だが福井常務は黙っていない。「一旦決まった人事を、正当な理由なくシンガポール行を拒むなどもっての外だ」と猛反発した。信也の兄弟は水戸藩士の血が流れているのか、カッとなると前後の見境がなくなる。大正二年七月、

信也は三井に這いつか張らないでも、お天道様と采の飯は何処にもある」と、大見えを

切の退職届を出した。兄四郎は、三井のトップ益田孝に目をかけられていたが、清廉潔白な性格は三井本社に馴染まず、波佐見金山の整理を任された。益田に次々と関連会社へ出され、本社に戻ることはなかった。四郎は信也へ「お前はこの会社では偉くなれない。今が独立のいいチャンスだ。好きなことをやればよい」と背中を押した。

信也は三井で海運のことに精通していた。船舶部で働いた十年間は、次のステップアッ

プへの良い経験となった。用船主任のキャリアから先ずは船の用船、船舶売買の仲介や貨物輸送の仲介業を思い付いた。早速、神戸居留地に事務所を置いた。社員は諏訪山の武徳殿で柔道に励む元気な二人を雇った。信也も暇を見つけては、尊敬する川村部長と道場で稽古に勤しんだ。

信也は十二月に「内田信也事務所」という看板を掲げ、本格的な海運業へ大きく舵を切った。

大正初めの海運界は、日本郵船が欧州航路に続き、インド・南洋航路を開設、大阪商船は四日市／ボンベイ航路を開いた。原田汽

船などの社外船も南洋航路などに進出した。三井物産船舶部は、三百万トンの荷物を抱え、二十五％を自社船で運送、他の七十五％は用船を利用した。よって山下汽船らの社外船は殆んど三井のコン

トロール下にあった。社外船主は、日露戦争の船舶不足で外国船を用船したが、戦後不況でトタン船腹過剰に陥り、係船を余儀なくされた。門司／横浜の石炭運賃が一トンあたり三十八銭まで暴落し、ニッチモサッチモ

いかなない船会社が数多く出た。神戸の港は赤腹を出している船で満杯だった。

信也は不況の中で海運業を立ち上げたが「天は自ら助くる者を助く」と肚は据わっていた。

◇

舵取り奮闘記

⑥

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「第一次世界大戦が勃発」

信也は不景氣の時こそ船を借りるチャンスと見ていた。どこの船会社も船を持て余していた。西宮の名門八馬汽船も用船先を探していた。八馬兼介は九隻の船を持っていたが、四千五百トンの第八多聞丸をベンチャーの信也に、一ヶ月四千二百円の用船料で貸した。信也は船を受取り、オペレーターとしてスタートを切った。しかし不況の中、三井も他の荷主も閑散としている。門司/横浜の石炭も安い運賃では大赤字である。その頃、兄四

郎は、富士製紙の専務をしていて。兄弟のよしみで荷物を当たったが、元請け船社は他所の船に回す荷物はないと、そっけない。いよいよ元手が底をついたころ、欧州でえらいことが起こった。

大正三年七月、欧州の火薬庫・バルカン半島でサラエボ事件が発生した。これをきっかけに第一次世界大戦が始まった。(この戦争は飛行機、戦車などの新兵器を使用する総力戦となり、物資輸送が増大、やがて世界的な船舶不足となった)

と予見し「すべての商品を買いまくれ」と世界中の店へ大号令を発した。特に高畑には「カネに糸目をかけず大量に鉄を買え!」と命じた。金子は数十社の製造業を立ち上げ、神戸の煙突男と呼ばれていた。地獄耳の山下亀三郎や勝田銀次郎もこのカリスマ男から何とか情報を取ろうと、相生町の鈴木商店に足を運んだ。

信也はこの好機を逃すはずがない。三井の先輩や兄から欧州大戦の情報は入っていた。兎に角、船を集めるのが先だ、と血眼になって船主回りを始めた。その頃、早速引き合いが来た。虎の子の第八多聞丸を松昌洋行の山本唯三郎が(向こう一年間、月八千円で用船したい)と言ってきた。山本は中国の開平

炭を八幡製鉄へ輸送していたが、大西洋に船を回した。運賃マーケットは米国の軍需品輸送などうなぎ上りとなった。

信也は、山本艇の先走りに驚いたが、又貸しで年五万円というぼろ儲けに目覚めた。「よし、今からはサブレットや、手当たり次第船をかき集めよ」と社員に発破をかけた。他人の種で相撲取る用船ブローカーだとなかされても耳に入らなかった。

欧州では消耗戦が激しくなり、船の引合いは売り手市場となり、信也は口をきくだけで大金が入った。だが良いことばかりは続かない。用船料マーカーは高騰し、利ザヤ稼ぎの妙味が無くなった。

◇

舵取り奮闘記

⑦

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「船成金が続出」

大正三年十二月、信也は資本金二十五万円で内田汽船株式会社を立ち上げ社長に就いた。株主は兄四郎などファミリーで占めた。信也は積極的に船を買い、それらの船を運航するという商売に舵を切った。早速、東京海上の融資を受け、勝田汽船より十七万円で大正丸を購入した。続けて物産から彦山丸を二十八万円で購入するという大きな賭けに出た。

大正四年になるとドイツ海軍はUボートで次々と商船を襲った。

日本船五隻を含む百七十二万総トンが撃沈された。船の欠乏は甚だしく、軍需・民需品の輸送に日本の海運界はパニックになった。造船業も四万トン程度の建造量が倍増して行った。鈴木商店ロンドン支店の高畑は英国の買付け要請に船を売りまくった。一方で鋼材を買い込み大量の造船を発注した。更に欧州から鉄を日本に運び、復航はサイゴンで米を積みフランスで売るという三国間輸送をやった。信也はこの機会に欧州の船社へ船を回し

で、信也のカフは益々上って行った。

大正五年四月、米国がドイツに宣戦布告した。欧米の商船は軍需品輸送に徴用され、Uボートの撃沈で千二百三十万トンが消滅した。日本の船舶は世界の海に満載の荷物を積んで莫大な利益を揚げた。このバブルに、船会社、造船所が続々と新設された。日本汽船が資本金一千万円で開業、東和汽船、鈴木系の帝國汽船など数社が誕生した。

未曾有の好景気でアツと言う間にぼろ儲けした「船成金」が神戸の街をカッポした。特に三大船成金と言われた、内田信也、山下亀三郎、勝田銀次郎は花街「花隈」で毎晩のどんちゃん騒ぎ、須磨辺りに別荘を建てその豪華さを競い合った。信也は鴻池組に「須磨御殿」を発注、急勾配の屋根にハーフィンバー風の装飾を付けた。ある雑誌に（内田信也は須磨御殿に三百万円を投じた。増築する際、いなば山から土砂を馬車で運ばせた。あの馬車曳きは北口から馬車を曳き入れ土砂を荷下ろしせず、そのまま南口から出た。再び北口から入って駄賃をこまかした。しかし監督に見つかって内田に処置を仰いだところ「俺は今、一日に二万も三万も儲けている。たかが馬車一台に一元か一元五十銭、捨ておけ、捨ておけ」と答えた）というゴシップ記事が出た。だが、成金達は政府が創設した「戦時利得税」でお金をタツプリ巻き上げられた。

◇

船取り奮闘記

⑧

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「商社、造船にも進出」

上げ潮に乗った船取り男は、貿易、造船にも手を出した。すでに鈴木商店の金子直吉は、海外に多くの支店を持ち、海運業にも進出、みずから造船所を設立し社船を造った。大戦ブームで三井物産を凌ぐ売り上げを現出した。ライバル心旺盛な信也は大正六年四月、横浜鉄工所を買収し内田造船所と改称、長兄誠太郎を専務に置いた。横浜市千若町に二万三千坪を確保、従業員三千人、六千トン級の船台を持つ関東最大の規模を誇った。兄

四郎と起こした三友商會を内田商事に替え、神戸京町を本社にロンドン、ニューヨーク、シアトル、香港などに支店を出した。信也の采配で内田汽船の船隊に荷物を満載し、三週間輸送で収益を揚げた。また佐賀県有田村に帝國陶業を設立し社長に就いた。

大正六年十月、信也は鴻池組へ内田汽船ビルを発注した。鉄筋コンクリート構造の地下一階、地上三階の最新式の洒落たビルだった。兄四郎は富士製紙の社長に就任し、黄金

鋼材を米国から貰い、日本は二隻を建造して米側に渡すという知恵者金子のお蔭で造船界は九死に一生を得た。金子は変わり者で何時も黒ネズミ色の詰襟を着ていた。頭の中は商売の事で一杯、定宿の東京ステーションホテルの床屋で散髪するのが唯一の道楽だった。ある日その床屋へ行く

と「金子さん、あなたは今朝刈ったばかりですよ」と言われ「これはこれ」と坊主頭を叩いた。その後、内田造船所は二隻の建造を引き受け、イースタン・グレート、イースタン・グレンを米国に引き渡した。交換の鋼材で満州丸（五千二百六十六総トン）を建造した。だがこの船が後年内閣を揺るがす「満州丸事件」のネタとなる。

ある日信也は、フランス政府から用船期間二年間、用船料トン当たり五十円のオフアーを受けた。合点承知と直ぐに福井丸六千トンを買船した。この船は五十万円で購入したが、二年間の用船料六十万円で元を取り、十万円（現・約一億円）が懐へ。兎に角、用船料五十万トンのというのは大戦バブルの最高値だった。

大正七年八月、富山県で米騒動が起こった。神戸に飛び火し、鈴木商店が米の買占めをしているというマスコミのデマに群衆が押しかけ火を放った。信也は早速、窮民救済のため、兵庫県へ五万円、須磨町と横浜市へ一万円、生まれ故郷の麻生町へ五千円を寄付して難を逃れた。

◇

舵取り奮闘記

⑨

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「第一次世界大戦が終わる」

大正七年十一月、長く続いた戦争は休戦となり翌年六月のベルサイユ条約で終結した。大戦ブームは潮が引くように次第に消えていった。

信也は須磨御殿に「順道館」という柔道場を建て毎日汗を流した。社員の中には五段以下の有段者が二十数名もいた。慶応大学が関西へ遠征した時、京都武徳学校、大阪武徳支部を屈服させたと聞いて、諏訪山武徳殿に彼らを招き試合をやったが、結果は引分けとなった。ある時、嘉納

治五郎は、京都武徳殿の試合で有段者二十人を抜く岡部平太という頼もしい青年に驚いた。嘉納は信也に「この男を師範学校体育科に入れたいが内田の奨学生にしてほしい」と頼むと、その頃、奨学部を造って青年を育成していたので快く承諾した。後年、この男は柔道界に岡部時代を築いた。また、順道館へ大錦、栃木山など相撲取りを招き柔道をやった。福柳という力士は信也に腕逆を決められ関節を痛めた。栃木山とは寝技に持ち込んだ

が、「ウン」という一声で投げ飛ばされた。更に漕艇部を設け須磨海岸で練習した。大阪での新聞社主催の漕艇会には内田汽船は強すぎて名譽の除外になったという。このような栄華を誇った須磨御殿も、数年後には手放す羽目になった。

大正八年七月、信也は母ハツと三男の兄、柳三郎と三人連れで神戸から上京する際、関ヶ原辺りで列車転覆事故に遭った。駅員の不注意から補助機関車と正面衝突したのである。一等車上部寝台の

兄は即死、老母は大けがで動けなかった。信也は寝台の下敷きになり「神戸の内田だ、救ってくれっ」と叫んだ。顔見知りの車掌や給仕が駆けつけ、窓から助け出されたが、新聞では「僕は神戸の内田だ、金はいくらでも出す、救ってくれ！」と尾ひれがついて報道された。顔面血だらけになった横浜の市議が、救出を後回しにされた腹いせでデマを飛ばした。

ある日、茨城県知事の力石雄一郎が、順道館で稽古中の信也に会いに来た。小倉橋の信也を書生と間違え「ご主人はご多忙でしょうが、お願いの筋あり茨城県民を代表して参りました。何時までも待ちますのでお引合せ願いたい」と言うといや僕が内田です」の返

事に力石は禿け頭を押さえ恐縮した。当時文部省では水戸に高等学校を設立する計画があったが、経費六十万円の捻出が難しいというので知事直々の来神だった。知事は必要経費百万円の内、地元負担が云々と説明すると「それなら全部私が出しましょう」と言う言葉に我が耳を疑った。大正九年の第一回生・江戸英雄は水戸高等学校史の発刊に寄せて（内田氏は欧州大戦に乗り三井物産をやめ海運界に進出、弱冠三十余にして巨万の富を得、高等学校増設の政府方針に沿い、日本の将来のため教育事業が緊切と考え、郷土に金百万円を寄付された。百万円と言えは当時では優に二校分に当たる額である」と記した。

◇

舵取り奮闘記

10

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「大戦バブルが崩壊」

大正八年になってト
ン千円もしていた船価
は半値まで下落した。
荷動きも次第に減少し
戦後不況が迫って来
た。川崎造船の松方幸
次郎はストック・ポー
トを持て余し「川崎汽
船」を設立し自社運航
を始めた。鈴木商店傘
下の播磨造船など苦境
に立たされた。金子は
この危機に大蔵省や銀
行から資金を集め、造
船会社も出資して資本
金一億円の「国際汽
船」を設立した。松方
は過半数の株主権を楯
に自社から社長、役員
を出す主張したが、

内田造船の信也と浦賀
船渠の亀三郎は大反対
した。スタモンの
末、金子は野田通信大
臣に相談し、高橋是清
大蔵大臣に仲裁を頼ん
だ。その後、松方と信
也、亀三郎の三人は、
赤坂の高橋邸に呼ばれ
「君らは一体何を言う
のか。いい歳をして喧
嘩なんかするといふこ
とはないじゃないか。
やめろよ」という高橋
の一言で三人は黙って
引き下がった。

内田造船の信也と浦賀
船渠の亀三郎は大反対
した。スタモンの
末、金子は野田通信大
臣に相談し、高橋是清
大蔵大臣に仲裁を頼ん
だ。その後、松方と信
也、亀三郎の三人は、
赤坂の高橋邸に呼ばれ
「君らは一体何を言う
のか。いい歳をして喧
嘩なんかするといふこ
とはないじゃないか。
やめろよ」という高橋
の一言で三人は黙って
引き下がった。

が、四百円まで船価が
下がった。信也らは契
約より安くしてやれと
造船所側に頼むと、未
工事分を値引きすると
返事があった。だが銀
次郎は「男が一旦約束
した以上変えられる
か。大阪鉄工に迷惑は
かけられん。裸になっ
ても船が残れば本望
だ」と意地を通した。

信也は、欧州の休戦
を知って（先んずれば
人を制す）という舵取
り魂が湧いて来た。内
田商事の村上武輔常務
を欧州に向かわせ、所
有船の売却を急がせ
た。ロンドンに着くと
北村正太郎支店長とバ
ルチック海運取引所に
張りついた。相場三十
八ポンドの所を信也の
指示通りに三十五ポ
ンドでオフアーすると早
々と五隻が売れた。訪
欧の折、村上常務と同
行した中原延平という
若者は、兄四郎の門下
生で、後に東亜燃料工
業社長となり、後年、
信也が明治海運会長
の時、タンカー「明泰
丸」の用船先になる人
だった。

信也は米国、インド
などの支店にも「恐慌
近し、手持品全部売り
払え！」と打電した。
信也の持ち船は十六隻
で一億円の資産だった
が三千万円の借金も抱
えていた。信也は内田
造船所を債権者の大阪
鉄工所（日立造船）に
株式全部を譲渡し借金
は棒引きとなった。彼
は真っ先に船成金にな
ったが、海事業から
手を引くのも早かつ
た。大正八年、信也は
母ハツが静養するた
め、熱海に別荘（起雲
閣）を建て、政友会
の原敬など大物を招き
「熱海会議」を開い
た。この男はそろそろ
政治という大海へ漕ぎ
出そうとしていた。信
也は大正九年三月初
め、上京中に興銀総裁
の土方久徴から「どう
も財界の様子が変だ、
気を付けんといけませ
んぜ」と注意された。
直ぐに原敬首相を訪ね
ると「経済界がおかし
い、いつも応援してく
れる茂木惣兵衛などは
選挙資金が出せなくな
った」と耳打ちした。
信也はすかさず「総
理、私は大丈夫です」と
呟いた。三月一五日
の大ガラで経済界は大
恐慌に陥った。

◇

舵取り奮闘記

11

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「珍品五個で騒がす」

原敬は大正七年の米騒動で寺内内閣が総辞職した後、総理大臣に就任した。多くの大臣を政友会が占める政党内閣だった。兄四郎は、富士製紙を辞め、早川電力の社長となった。また、原内閣で開墾助成法が決まり、渋沢栄一、益田孝の肝いりで中央開墾会社の社長を兼務した。信也は内田汽船の顧問に政友会の横田千之助、江木翼を置いた。毎月二十九日には原内閣成立記念日と称して、閣僚たちを原お気に入りの木挽町「花屋」に招き会

食をした。ある時、原は信也に、床次大臣と彼にぞっこんの新橋芸者の利恵治を（差し向かいで炬燵にでも当たらしてやっては……）と粋な計らいをしたが、利恵治はうつむいたまま、堅物の床次は沈黙を守り続けたそうだ……。

大正十年、内田信也が絡む金銭問題が国会で取り上げられた。後年のロッキード事件を彷彿とさせるが、三月の国会で、野党憲政会の某議員が満鉄の金銭問題を暴露した。先ずは森格（前掲・元三井

物産重役）が経営していた「塔練炭鉱」を満鉄が二百二十万円で買った。その後、森は衆議院議員となり政友会に入った。つまりポロ鉱山を満鉄は高値で買い、森はこれを選挙資金に使い、残りは政友会に入れたというもの。更に信也が船鉄交換で造った満州丸を、不当の価格で満鉄に売り原首相に贈贈と、爆弾発言をした。直ぐに政友会は反撃に出た。そのネタは信也が用意した「珍品五個」の礼状だった。九年の衆議

院選挙の頃、信也はあ

る理由で、憲政会総裁の加藤高明に兄四郎を紹介して五万円を献金した。その時、加藤は「珍品五個を受け取った」と丁寧な礼状を信也に送った。これが政友会に渡り国会で公表され、憲政会の攻撃は腰砕けとなり、内田信也の名が天下に響いた。信也は自伝で、礼状は四郎が原さんから返却されたが横田の手に渡った。信也は直ぐ上京し「加藤氏の私状を公表するのはけしからん」と詰問すると、横田は「君の耳に入れば拒否されるのは分かり切っているから、政界の安定が出来れば良いと思ってやったのだ」と陳謝した。ポン友の山下亀三郎の自伝『沈みつ浮きつ』に加藤、横田、森の人物評がある。

——加藤高明が大隈内閣の外相時に信也主催の宴会で、主賓の加藤は亀三郎に「貴下は何をしとるか」と無遠慮に問うと、成金で威勢のいい亀さんは「私は船頭です」と吐き出すように答えたという。横田、森については「その俊敏、その断行力、その人を食った点、容易に手紙を書かぬ点、議論の少ない点、清濁併せ呑むの点、如何にもその性質が同一のように思われた。今日の政党解消時代に両氏が存在して居たら如何なる手を打つか……と記されている。

平民宰相の原は大正十年十一月、東京駅で大塚駅の鉄道員に心臓を刺され亡くなった。享年六十六歳だった。信也は原が揮毫した（断而行之）という書を所蔵している。

舵取り奮闘記

(12)

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「政界へ舵を切る」

いよいよ成金も豪華別荘を手放す時が来た。大正十一年九月、信也は神戸の富豪小會根貞松に須磨御殿を百万円で売って、東京麻布区三河台へ引っ越した。信也は政友会との関係から政治に興味を感じていた。当時の政治家は、新聞記者などに嗅ぎつかれないよう素人の実業家を使った。信也は原敬のお使い番として要人との仲を取り持った。

大正十二年九月一日の関東大震災の時、信也は丸ノ内の内田商事にいた。幸い三河台の

本邸には異状がなかったが、横田千之助ら政界人や新橋の芸者利恵治ら数名が罹災民として転がり込んできた。その後本所の被服廠跡で数万の人が焼死したことが判明した。信也は現場の悲惨な状況を目の当りにして、何とかしなければと、陸軍から借りた天幕を立て、各宗派の僧侶にお願いし、毎日交代で回向してもらった。

さて、信也が政界入りを決意したのは高橋是清の護憲声明だった。小泉策太郎が起草した檄文を読むや(我

こそは憲政護憲の戦士たらんと一念発起したと高橋を訪ね熱い思いを語った。ついに信也は魑魅魍魎の世界へ舵を切ったのである。大正十三年一月清浦内閣は解散、総選挙は五月十日に決まった。信也は九州、神戸、横浜などの選挙区から誘いがあったが、鹿児島郡夏海村生まれの母ハツの意見もあり、茨城五区の鹿島・行方郡から出馬した。選挙本陣を麻生町の旅館大黒屋とし、北浦、霞ヶ浦に快走船を曳き込んで水軍の陣容を整え

た。大黒屋前には最新式の自動車数台を米国から取寄せ、何処へでも飛んで行った。しかし対立候補は、明治三十五年初当選の宮古敬三郎、与党政友本党に所属する強敵で清浦内閣のブレーンだった。

選挙戦たけなわとなり、野党内田派に対する選挙干渉が酷く八百人の違反者が出た。幹部が更迭されても直ぐに収監され、信也は一人で選挙演説をする羽目となった。だが有権者はこれに反発し婦人たちは丑の刻参りをし、必勝を祈願してくれた。暗夜にお参りの提灯が転々と動くのを見て信也は男泣きした。

また船頭は検事や刑事を渡船に乗せない、子供らは与党の車にバカと書いた。いよいよ五月十日が来た。内田が勝つか宮古が勝つか、

世間はこの取組に賭けを張る族も出た。何といても内田派に違反者続出の不利があったので、多数は宮古の勝利を確信した。信也は兄四郎と幹部数名で(激戦地を早く引き上げろべし)と麻生を船出し佐原に上陸、汽車にて帰京の途に就いた。兄四郎は疲労困憊の皆に「負けた負けだ、もうクヨクヨするんじゃない」と言う

た。結果は内田五千八百四十四票、宮古二千三百十九票の圧勝だった。

舵取り奮闘記

13

内田信也物語

〈連載〉 宮本しげる

「国会議員の演説」

五月の選挙で護憲三派が大勝し、清浦内閣から加藤高明内閣になった。政友会から横田が通信大臣に就任、信也は山本条太郎と一緒に党の会計監督に選ばれた。信也は政界人として第一歩を踏み出したが、上野精養軒のパティで「一期当選の変わり種に一席ぶたせろ」と卓上演説に指名された。実業家にまともな政談演説など出来まいという空気に、信也はいきなり食卓の上に飛び上がって「諸

君、今までの弁士達は卓上演説というのに卓

の前でやっている。僕こそ正に卓上演説だ。虚偽は政治家の禁物だ」とやって拍手喝采を受けた。信也は噴飯物の話が好きで、犬養毅から聞いた一席は（尾崎行雄が若かりし頃、新富座で例の雄弁を揮っている最中に、反対党の者が舞台の奈落に入って、回り舞台を踏んだからたまらない。颯爽たる尾崎先生は演壇もろとも一と回りして、聴衆の顔面から消え失せた）という珍談。

信也は与党の一員として、貴族院改革を唱

えて全国遊説をおこなった。神戸の青年会館で「そもそも貴族院と衆議院は車の両輪である。所が衆議院は空気入りのゴムタイヤに向

上しているのに、貴族院は鉄輪のままで、特権階級たる華族の専制を抑制すべきである」と一席ぶった。その威勢のいい演説に感激した若者がいた。東京高商出で鈴木商店に勤めていた後輩の大屋晋三で（発しては萬葉の桜となり凝ては百鍊の鉄となり）という水戸学の藤田東湖の漢詩を

引用した話に、自分も将来は政治家として経国済民の事業に当たりたいと念願した。大屋は帝人の社長になり運輸大臣など歴任したが、死ぬまで社長を辞めなかった。

大正十五年一月、加藤高明首相が死去し、若槻禮次郎内閣が誕生したが、護憲派三党のゴタゴタが続いた。十二月二十五日に大正天皇が崩御され諒闇に入

った。

短い昭和元年が明け、朴烈事件が起こった。信也は芝公園の国民大会に出席し、政府の非を大いに獅子吼した。やがて政局の混乱も田中義一政友会総裁の声掛けで三党首会談が行われ、有名な「政府においても深甚の考慮をなすべし」という覚書で収まった。だが二月の予算委員会で大

混乱が起きる。政友会吉植議員は「台湾銀行が鈴木商店へ二億円のこげ付きがあり、困憊の極にある」と質問すると、片岡直温大蔵大臣は「諸君があまり騒ぐのでたった今、渡邊銀行が取付けに遭って店を閉めた」と口を滑らした。これを発端に預金者は群れをなして銀行に殺到した。鈴木商店は台湾銀行の融資拒絶で行き詰り、債権者会議を開く事態となった。大屋晋三は憧れのロンドン勤務が、金子の命令で岩国の帝人行となっていたので、路頭に迷うことは無かった。金子は弱みを見せることなく、東京ステーションホテルで（背水の陣屋をかこむ桜かな）と詠んだ。一方でロンドン帰りの高畑誠一は日商の再建に乗り出した。

舵取り奮闘記

14

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「海軍次官となる」

鈴木商店の破綻で、昭和二年三月、政府は枢密院に二億円の台銀貸付を諮ったが、伊東曰代治の毒舌に遭い、遂に若槻は内閣を投げ出し田中義一内閣の成立となった。田中は秋の出身で陸軍大学を出て日清日露を戦った。原内閣で陸軍大臣になったが、先天的に政治家としての素養があった。政友会総裁就任の頃、持参金三百万円が陸軍機密費横領だと告発を受けた。この事件に神戸の乾新兵衛が絡んでいると憲政会が糾弾した。ヌーボー式の

田中は「乾という人は知らない。知らない人から金を借りるなどバカバカしい話はない」と言い、乾は「田中男爵の名は知っているが、三百万円の大金を担保もなしに貸すわけがない」と二人とも知らぬ存ぜぬの一点張りだった。結局真相は不明で（天下の金貸し新兵衛）の名だけが広まった。田中が北海道に演説に行った時、羽織袴の地元人が懇慫に挨拶した。すると田中は「やーどうだい、お父さんは変りないかね」と言うと「いや昨年亡

揚子江艦隊司令官を勤めていた。漢口に行って蒋介石と会談し、日貨排斥運動の取締方を要請すると、「漢口くんたりまで日本の陸戦隊がやって来て、海軍旗を先頭に市中行進などやるから、却って民心が悪化する。先ず陸戦隊を引揚げるようにして貰いたい」と蒋介石が申入れて来た。次の日、蒋介石が共産軍征伐のため漢口郊外から出陣するといので、賀屋と金沢を伴いその軍容を見物に出かけた。中国軍隊の装備は幼稚なもので、唐傘を負うもの、洗面器をぶらさげるもの、食器類を腰に吊すもの、まことに千差万別、近代的装飾は全くみられなかった。信也は会見をすませ

の遡航に出会った。信也らは乗組将校たちと双眼鏡を向けて、艦名を言い当ようとしたが、どれもあやふやな答えばかりである。すると、傍にいた賀屋が「あれはカンバーランド号だ」と明言した。賀屋は度々軍縮会議に列席しただけあって、軍人も及ばぬ軍事通であった。英国巡洋艦の当てっこをしても、海軍々人が賀屋に及ばなかった。信也は自伝で「これは軍人万能主義の誤りだったことを示す好例といえよう。早く軍部大臣文官制にしておけば、ばかばかしい太平洋戦争にも突入せず、こんなみじめな戦敗国ともならなかったであろうにと、今更ながら痛恨にたえない」と語っている。

◇

◇

米内光政が海軍少将で

来る途中、英国巡洋艦

舵取り奮闘記

(15)

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「政友会の舵取り」

昭和四年三月の第五十六議会において張作霖爆死事件に関し、田中義一首相は中野正嗣議員の質問に「後で真相を究明して報告する」と答えた。が、これは陸軍部の圧力で真相を発表出来なかったのである。田中は陛下の御下問に対しても同様の奉答をしたので、陛下からお叱りを蒙った。田中は岡田海相に総辞職を相談し、信也も（事態ここに到たら、すべからず桂冠すべきである）と同意した。七月田中内閣は総辞職し、濱口雄幸内閣

になった。

信也は、田中が政策

の行き詰りからの辞職

ではなく、陛下への食

言による辞職と考え、

今後政友会が多数党に

なっても、田中総裁が

留まる限り、政権は獲

得出来ぬと判断した。

そこで元老の西園寺公

に相談すると「来年の

選挙で、まあ政友会が

勝たぬ方がいいでしょ

うね」と語ったので、

田中総裁を訪問し園公

の言葉をありのままに

伝えた。田中は嫌な顔

をして、ただ「うんう

ん」と聞いていた。信

也は政友会の分裂を止

めるには犬養毅翁を担

ぎ出すしかない」と、隠

居している八ヶ岳の富

士見荘に乗り込んだ。

「憲政擁護のため是非、

田中総裁の後を襲

って総裁を引受けて下

さい」と卓を叩いて大

声を張り上げると「内

田さん、声が大きいわ

よ」と隣室の奥さんに

注意された。

その後、田中総裁が

狭心症のため亡くなっ

た。信也は再び西園寺

公に会って「田中総裁

の急逝で、後任総裁が

床次でも鈴木でも党は

割れますから、犬養氏

に就任を要請しまし

た。それで（公爵の御

意見を聞いて来い）と

いうので罷り出まし

た」と口上を述べた。

やがて犬養の政友会入

党が決まり、代議士会

で開口一番「周は旧邦

なりといえども、その

命は維れ新たななり、立

憲政友会その名は古し

といえども、そのなす

ところ日々新たななり」

と述べて九月二十九日

政友会総裁に就任し

た。

昭和五年、選挙後の

特別議会で犬養と信也

は質疑の演説時間でも

めた。犬養は十分、信

也は四十五分と主張し

たが、犬養は「十五分

に切り詰めろ、惜しい

材料を容赦なく切捨て

てこそ名演説となるの

だ」と諭したが結局信

也は三十分掛かってし

まった。

十一月、濱口首相は

東京駅頭で狙撃され、

帝大病院に入院して治

療を受けた。岡山で暮

を打っていた犬養は側

近が帰京の手配を急ぐ

ので「バカ、総理が殺

されて反対党にすぐ政

権が来るようなことで

は、暗殺はつきない

よ。そんなに騒ぐな、

まあ坐れ」と、また暮

を打ち続けた。

昭和六年春の議会で

濱口首相は政友会議員

が登院を強要するの

で、病体をおして演壇

に立つことになった。

信也は濱口の人格、特

に議政壇上における容

姿には、敵ながらほれ

ぼれするものを感じて

いた。信也はライオン

宰相へのロンドン条約

に関する質問を中止し

た。四月、濱口は病苦

に克てず首相を辞任、

退院後は療養に努めた

が治療の甲斐なく、八

月二十六日死去。享年

六十二歳だった。

舵取り奮闘記

16

内田信也物語

〈連載〉 宮本しげる

「日本船舶改造案」

濱口首相の死去で若槻礼次郎は再び総理大臣に就任した。が、六年九月、満州事変が突発し、事変は政府の抑止にも拘わらず、陸軍の専横によって漸次拡大されて行った。若槻内閣は安達内相の閣議出席拒否などの、閣内不一致が発生し、直ちに総辞職を余儀なくされた。西園寺公望元老は十二月、野党である立憲政友会の犬養毅総裁に大命降下した。

信也は閣内に当たって犬養総裁担ぎ出しの貢献者として、相当重要なポストを与えられ

るものと皮算用していた。ところがいざフタを開けてみると、犬養は信也と対立関係にあった森恪を書記官長にあげ、三土忠造通相の下に信也を通信次官に任命した。頭に血が上った信也は、総理官邸に行つて辞表を絨毯の上に叩きつけた。犬養は「三土が大蔵大臣を熱望しておることは、君も知つての通りだが、金輸出再禁止という重大問題を強行するには、どうしても高橋さんでなければ出来ない。それで一先ず高橋さんを担ぎ出したわけ

だが、追つて三土を大蔵に廻らすつもりだ。それで差当り三土は老蔵相の助手として、通信省の方は君に委せるようにするから、無冠の通信大臣だと思つてくれ」と信也をなだめた。

信也は通信省に海事審議会を設置した。船舶過剰と荷動き激減による海運不況対策だった。信也は官民で知恵を絞つたスクラップ&ビルド方式で助成金を交付するという画期的な案を纏めた。早速、渋谷の無私庵に郵船・各務鎌吉、商船・堤啓次郎、三井船舶・川村貞次郎、山下汽船・山下亀三郎、浦賀ドック・今岡純一郎らを招き、海運、造船界の刷新案を計った。この一石二鳥の案を、三土通相を通じて高橋蔵相に補助金支出の交渉を進めた。だが高橋は一向に耳を傾けない。信也は我々の説明が足りない和高橋邸を訪れて、国際汽船と三井船舶のマニラ・紐育航路における外貨収得の勘定書を詳細に亘つて説明した。すると高橋は「そういう話なら僕は喜んで承諾する」と、直ちにその場へ大蔵省主計局の質屋を呼びつけ、即時実施を命じた。昭和七年海事審議会は、後年の内航海運が行つた船舶調整制度の基となる「船舶素質改善助成施設」を実施した。

付き五十円の助成金、総計千百万円の予算で九十四隻四十万トンの老齢船が解体され、三十一隻二十万トンの新鋭船が建造された。これにより過剰船腹の近海区域に四千トン十四ノットの新鋭船が就航し、内航用に五百トン前後の小型快速船が建造された。また一万トン、十八ノット以上の優秀貨物船が続出し、これが紐育航路に就航、わが国は英米につぐ世界の海運国となった。海軍は優秀船の出現に、ハインチ砲座を据えることを目論んでいた。この船舶改造案は世界的に有名となつて、ドイツの船会社は、わざわざ来日し通信省と信也の私邸を訪問して、内容や実施状況を研究して行った。

◇

◇

舵取り奮闘記

17

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「五・一五事件が起きる」

犬養内閣は昭和七年二月の総選挙で、三百三の議席を獲得し、予想以上の大勝利を博した。が、五月十五日午後五時三十分、陸海軍の青年将校らは首相官邸、政友会本部、日本銀行などを襲撃した。犬養は「問答無用」の一言で暗殺された。この衝撃的事件に信也は、犬養が日曜日の夕刻、官邸にいることを連中が知っていた事に疑問を持った。当日は犬養の直系である坂井代議士の初七日に当たっていた。それで難波代議士が午後五時ごろ翁

を訪ねて「これから一緒に線香をあげに行きませんか」と勧めたが、翁は「行つてやりたいのは山々なんだが、ちよつと人が来るので、君だけ行つてくれ」と答えたという。犬養は三年前に遺書を書いていた。原敬とそっくりな、告別式は近親者にて行つ、葬儀は簡素に、墓石は位階勲等を記さず墓地は青山を良しとす……。信也の自伝には——（こ

あり、次いで選挙中の二月九日には井上準之助が射殺され、また三月五日には團琢磨が兇変に遭い、遂に五・一五事件の突発をみて犬養が斃れた。この年こそは日本にとって誠に多難な年だった。しかもこの年を境として日本は急角度に、軍閥専制の時代に突入して行つたのである。犬養翁の遭難で鈴木喜三郎氏が、政友会総裁に就任したが、僕は従前から鈴木氏の敵手なる床次氏と、ある程度の理解があった関係もあり、かたがた閣内におい

て、いわゆる非幹部派と目されていたから、自後冷飯食いの一員として、漸次党の輻機から離れて行つた」と記されている。

斎藤実内閣は五月二十六日、挙国一致内閣として五・一五事件の後を受けて成立した。この内閣に政友会は高橋蔵相、三上鉄相、鳩山文相を閣僚として送っていたが、閣僚引揚げの可否で党内が紛糾した。

昭和九年春、帝人事件が突発し、三土、鳩山、閣僚の名が出て、鳩山一郎は（明鏡止水）の心境を吐露して内閣を退いた。政府批判が高まり斎藤内閣は七月三日総辞職した。後継内閣は、五・一五事件の後で、政党内閣の実現は困難で、やはり斎藤内閣型の、反軍閥的挙国一致内閣が必至と考えられていた。この時、図らずも大命は海軍大将岡田啓介に降った。岡田はこの朝、新宿のあばら家によれよれの浴衣を着て、禅坊主のような恰好でいたが、そこへ侍従から電話がかかってきた。直ちに参内を……というので門前の豆腐屋から冷奴を買って昼食をすまし、宮内省差廻しの自動車で参内、謹んで組閣の大命を受けた。一方、政友会は岡田内閣に付くかどうかで党議沸騰した。番町の鈴木総裁邸での幹部会に信也は、わざと帰り易いように末席の方に沈黙を守って坐っていた。岡田大將は海軍次官時代の親分だったので、風向きが変わったと舵取り男はほくそ笑んだ。

◇

◇

舵取り奮闘記

(18)

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「鉄道大臣になる」

岡田啓介内閣は九年七月八日に無事成立した。政友会から床次竹二郎が逋信大臣、山崎達之輔が農林大臣、信也が鉄道大臣として入閣した。政友会は岡田内閣非協力を決議していたので三人を除名した。その後、信也は山崎らと図って新党「昭和会」を結成した。信也は政界に転身して十年余で念願だった大臣の椅子に座った。大臣任命を機に内田汽船、内田商事を他人へ譲渡し政治活動に専念した。三河台の内田邸で母ハツは、孝行息子二

人に囲まれ満面の笑みで「四郎は日魯漁業という大きな会社の社長になるし、信也は今が、二十万職員の協力により国有鉄道を発展させます」と第一声を上げた。

その後、名古屋の熱田神宮に参拝し、特急「燕」で関西へ向かった。大阪駅で菜っ葉服に着替えた信也は、五十三型の機関車へ駆け足で乗り込んだ。神戸駅に着いた大臣は、知事、市長ら歓迎の人たちに敬礼した。船屋の仲間や花隈の奇麗処も集まり駅頭はえらい騒ぎとなった。翌日の（鉄道大臣機関手になる）という見出しの新聞を見て信也は感無量

だった。

信也は就任と同時に、綱紀肅正、安全運転、サービスの改善という三大政綱を省内に訓示した。大衆のため三等寝台を設け、特急富士の一等車にはシャワーを付けた。が、これは人気がなくそのうち無くなった。

底トンネルを門司寄りに変更するように、海底土質調査のボーリングを直ちに実施する。なお開通の暁も門司市民の生活問題に考慮を払い、門司鉄道局の存置を充分考える」と発表したので、満場総立ちとなって、拍手歓声が巻き起こった。

信也は彼の後藤新平が提唱して誰も実行に移さなかった関門トンネルを掘ろうと考えた。昭和十年五月、九州へ実地視察に行くと下関市民は大歓迎したが、門司側は大反対である。信也は門司の山へ登り、既定路線を門司寄りに変更できないか平井工務局長に尋ねると、急勾配になって

も新型電気機関車なら問題なしと結論が出た。その後、門司クラブの歓迎会で「門司市民の要望を容れて、海

◇

◇

舵取り奮闘記

19

内田信也物語

〈連載〉 宮本しげる

「鉄道大臣の辣腕」

——後の話、昭和十六年信也は開通式に招待された。大阪駅で「博多行」の札を見てひとり快哉を叫んだ。式場では工事の功労者釘宮所長は一般来賓の席にいた。メインテーブルでふんぞり返っている閣僚らの祝辞が続き、信也の番が来た。「実行を伴わぬお念仏がなんだ。実行者があるってこそ初めて貫通できたのじゃないか」と一発かませ「末席に霞んで見える釘官君の如き、献身的に本仕事を完成せしめた功労者に対してこそ、萬腔の敬

意と謝意を表さねばならぬのだ」と毒舌を揮った。その晩、春帆樓の宴会で昼間の挨拶に感激した新旧技術者らが、一同乾杯して信也を胴上げした。——話を昭和十年に戻すと、ある日ボン友山下亀三郎が大臣室にやって来た。信也が山下汽船の秘書に「社長の履歴書を出すように」と指示をしていたので、てっきり勅選議員の事と早合点した亀三郎は「大臣、折角のご厚意ですが何卒ご容赦を……」と断った。信也はニヤニヤしながら「それな

ら仕方がない、実は運賃審議会の委員になってもらって、一等のパスを上げるつもりだったのだよ」とポケットからパスを見せた。トタン亀さんは「内田君、いや内田さん、大臣、前言取り消します。それは是非下さい」と大臣の机の廻りをグルグルと、二人は子供のようにつっかえつこをした。亀さんは会社に帰ると「友達は有難いものだ」と信也の厚意を喜んでパスを皆に見せ、早速そのパスで神戸へ出かけた。亀三郎は「議員など柄

にもない、自分は海運の箱屋だ」と船主協会の会長もやらなかった。

信也は組閣早々の予算編成で早速「舵取り」を始めた。陸軍の要求と大蔵省の教学と教千万円の開きがあることを知り、この解決に鉄道益金の一般会計繰入という大胆な事を考えた。秘かに喜安次官、工藤経理局長、長崎会計課長らと計り、数千万円の一般会計繰入を断行する準備をして、十二月の閣議に臨んだ。閣議は藤井蔵相と林陸相の正面衝突となつて深夜まで続いた。閣議休憩中、とうとう広田弘毅外相が「この際我々は総辞職して、陸軍に政局を担当させた方がいい」と言う。信也は「軍閥に政権を渡すことは国家を滅亡に導くものであ

る」と反発した。信也は一般閣僚に鉄道益金繰入の秘策をもらさず、岡田首相にだけ耳打ちしていた。閣議が膠着状態のまま夜になると岡田は「鉄道大臣、何か名案はないか」と催促した。信也は徹夜でも閣議を続けた上で、最小限度に財布を開くつもりだった。そこで、容易に岡田の助け舟要請に乗らなかつた。遂に午前三時半となり信也は、予め用意した五千万円のうち、鉄道会計から三千万円を一般会計に繰入れることを正式に提議した。同時に朝鮮、通信両特別会計からも若干の繰入をして昭和十年度予算は無事成立をとげた。病身の蔵相は辛うじて閣議に出席し、涙を流して感謝の辞を述べた。

舵取り奮闘記

(20)

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「ダルマ宰相・高橋是清」

病床の藤井蔵相は閣議の十数日後に逝去した。信也は危篤の報に接するや、高橋是清翁を訪ねて後任問題につき意見を求めた。「藤井は、財政は分っておったが、どうも経済の知識が少なかったから、今度は経済に精通した者を出さねばならん。いっそ内田君、君がやれよ。後からワシが面倒をみてやるから……」と言ったが、もとより信也はその任にあらずと思っているの

え、直ちに岡田首相にこの話をした。翌朝、岡田が礼を厚くして口説いた所「ワシは病体で常にガスがとろろ嫌わず出るから、宮中でのお儀式は一切遠慮する条件でならお受けする」という返事だった。岡田は早速その旨を陛下に内奏し、高橋翁はまたもや蔵相に就任したので、財界もこれを非常に歓迎した。が、政友会首脳部は党議に背くものとして翁の離党を求めた。よって翁は望月、山崎などがある昭和会に席を置くことになった。

信也は自伝でこのように語っている。——高橋翁の御親任の厚いことは傍から拝しても、実に感激にたえぬところであった。昭和十年の夏、葉山御用邸に閣僚が二班に分れて天機奉伺に伺候し、御昼食の御陪食に預かったが、その際、僕が

「高橋はこの葉山の自分の別邸に時折来ているのですが、何分にも病中のこととて御遠慮申上げております」と申上げた所、病状についてねんごろにお尋ねがあった上「是非一度気易くして出てくればいいのに……」と仰せられた。この旨を逐一、高橋翁に伝え、是非第二班の天機奉伺には参加されるようにと勧めた所、翁は感泣して第二班に加わり伺候された。陛下は翁の姿をお認めになるや「おう高橋、よく来てくれたね、身体はどうかい、よかったね」と、あたたかき慈父に對するかの如く、温情をこめて翁をいたわられた。

この情景を目のあたり拝して、他の閣僚は一同貴い泣きをした。——信也は高橋翁には政界入り以来、格別の指導を頂き心から傾倒して、慈父に對する心持で接していた。高橋は柳橋の箱屋時代の思い出話を一杯機嫌で信也に語った。「俺だって、その頃はこんなダルマじゃなかった。ほっそりした粹な兄さんだったんだよ。箱屋をやっているうちにさる芸者と割りなき仲になって、秘かに楽しんだこともあるんだ。その芸者である日、柳橋の土手を手にとって歩いていると、この芸者の旦那にばったりぶつかってしまった。この旦那というのが、幕末の剣士千葉周作の高弟とかで（こら、待て）とばかり大喝一声、追いかけて来た。相手が悪い、命あつての物だね、青くなって逃げたよ。だが何処までも追っかけて来るんで、とうとう路傍の涼み台の下にもぐり込んで、危く命拾いをしたんだが、こいつはおっかなかったよ」と、数奇なロマンスを氣さくにも披露した。

◇

能取り奮闘記

(21)

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「二・二六事件その一」

昭和十一年一月の議会は天皇機関説、国体明徴論を中心として、野党の攻撃が激しく、二十一日政府は衆議院を解散し総選挙となった。その結果は民政党と信也の昭和会とで、辛うじて過半数を制した。開票直後の二月二十五日の閣僚午餐会では、高橋是清も大いに満足して両党の選挙委員長だった町田忠治と内田信也の労をねぎらい、ニコニコ顔で乾杯した。しかし、これが高橋翁と信也の今生の別れとなった。

翌二十六日未明、赤

坂の高橋邸に兵隊百名が襲撃し、中島少尉らは就寝中の高橋蔵相を殺害した。この日、青年将校二十数名は、昭和維新を叫びクーデター事件を起こした。近衛兵含む千五百名の歩兵を引き連れ、総理大臣官邸や重臣の私邸を襲ったのである。

岡田啓介首相は福井県の出身で、親族に妹婿の松尾伝蔵、娘婿の迫水久常がいる。松尾は義兄が総理になるや志願して私設秘書となり官邸に住みこんだ。エリート官僚の迫水は総理秘書官に任じられ

官舎にいた。

さて、福井市旭小学校には「岡田啓介・松尾伝蔵物語」という紙芝居がある。岡田と松尾は、旭小学校の第一回入学生である。

——昭和十一年二月二十六日の雪の日の朝のことです。どなたも。ばたんばたん。「岡田、どこにいるのだ」「さがせ、さがせ、絶対隠れているぞ」「総理大変です」「どうどう、軍隊がおそってきました」「何だ。どうしたんだ」「軍隊がおそってきました」「どうかお逃げ

ください」「いや、私は逃げない。死ぬことは怖くない」「何をおっしゃるのです。あなたはまた大切な仕事が残っています」

た迫水は宮内省からは逃げない。死ねことゝ高橋是清さん、斎藤実さんの所に弔問の勅使がたつた。岡田総理の所にも弔問の勅使をたてるが、官邸で受けるか、私邸で受けられるか」という電話を受けた。あわてた迫水は「勅使のご差遣は暫く猶予願います。いま遺骸は官邸にございますので、後に改めてお願い致しますので勅使はその時にして下さい」と答えた。

迫水は、いち早く岡田首相の存命を宮内省に知らせる必要に迫られ、反乱軍に対し総理の自宅へ連絡に行くと称して、囲みの外に出る許可を得た。官邸を脱出した迫水は、宮内省に辿り着き、湯浅宮内大臣に総理生存の報告をした。

◇

22

〈連載〉宮本しげる

信也は、早朝五時半ごろ、総理官邸から「只今総理官邸は襲撃を受けております。す

隊による襲撃というこ
とを知った。即座に高
橋蔵相邸、斎藤実邸に
使いを馳せたが全然連
ることが出来た。

一方、総理生存の報

隊による襲撃ということを知った。即座に高橋を渡り、漸く参内することが出来た。

を受けておきます。すぐ避難して下さい！」という緊急の電話を受けた。直ぐに息子男を

使いを馳せたが全然連絡がとれず、その情況は判明しない。各閣僚にも電話をしたが退避

一方、総理生存の報告をした迫水秘書官は、逐次宮中に集まつて来る閣僚に耳打ちし

連れて三河台の私邸から自動車で、兄の窪田四郎宅へ向うと、雪の街の角々に衛兵が立っている。そのまま車を進めると、六本木の四辻には十数名の着剣兵士がいて、溜池の方へゆく車を一切通行止めにしていた。信也はどうにか高樹町の四郎宅に掛け込み、海軍省に電話すると、これが軍先が不明で、一時間余にして連絡を諦め、宮内省と折衝の結果、直ちに参内と決した。信也は車を高樹町から明治神宮外苑、新宿へと迂回し英国大使館前を通って乾門から入ろうとすると、数十名の近衛兵士が着剣でこれを遮った。止むを得ず宮内省に電話すると平川門から参入せよとのことだ。先ず大角海相に「実は岡田総理は生きて居られます。海軍の手で何とか救出してもええませんか」と伝えらる。「迫水君、この話は聞かないことにするよ」と陸軍との関係をよく慮った。次に内田鉄相に報せると、信也は飛び上がって喜んだが迫水は「これは大事なことだ。鉄道大臣、軽率妄

動しないで下さい。貴方は足早に物をおやりになる方だから、何分にも総理は敵の中に虜になっているのですから」と念を押した。その内、後藤文夫内務大臣に「内閣総理大臣臨時代理」という辞令が出た。二十七日正午、岡田総理が福田秘書官、小坂憲兵らに救出

内していいよ」と言うので「どうぞ参内して下さい。お出迎えします」と返事をした。二十九日夕刻（憲兵司令官）という貼紙を張った自動車が、宮中の玄関へ滑り込んだ。待ち構えていた信也は、岡田を抱きかかえるように玄関に招き入れた。御学問所で陛下は「岡

「田、無事でよかった」という言葉に、岡田は恐惶感激し涙をこぼした。

四日間に及ぶ大事件は、ラジオ、気球、飛行機等による帰順勧告で無事鎮定され、将校は悉く縛についた。その後、岡田首相存命の公表があり、閣議で岡田が辞表を捧呈することにした。三月九日廣田弘毅が首相となり信也に辞職の御聴許があった。

舵取り奮闘記

23

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「鉄道疑獄事件その一」

昭和十一年三月、岡田内閣が倒れ廣田弘毅新内閣になった。陸相に寺内大將が就任するや軍部大臣現役制が復活した。参謀本部付であった武藤章中佐は、組閣本部へ乗込んで来て「政党内閣は四名に限定する」と反っくり返った。この為、政党内閣は政友会と民政党で四人だけとなった。

信也は町田民政党總裁から入閣を匂わされていたが叶わなかった。一方、組閣参謀の吉田茂も陸軍の反対で外務大臣になり損ない英国大使に任命され

た。その吉田は赴任する前に、内田邸を訪ねてきた。「あの時、君の入閣を妨害したのは僕だ。一言お詫びをして英国へ行きたいと思

った」と述べた。信也は吉田の手を固く握りしめ「ありがとう、大臣なんぞは、これからまた何遍も降ってくるよ。しかし君のような親友はまたと得られない。僕は大臣の椅子よりこの親友を得たことを、心から幸せに思う」と兄弟の契りを結んだ。

五月、「阿部定事件」という猟奇事件が

発生、七月、二・二六事件の首謀者ら十七人に死刑が言い渡され

た。九月、信也が推進した関門トンネルの着工式が門司で挙行されていた頃、信也に警視庁から任意出頭の命令が来た。網紀肅正をモットーにしていた舵取り男は、鉄道疑獄事件の被疑者となった。――話は鉄道大臣の頃に遡る。信也が鉄相に親任されると、岡田首相の紹介で飛島組社長の飛島文吉が、内田邸にお祝いだと称して訪ねてきた。信也は飛島に「請負業者とは役所以

外では会わぬ主義だが、貴族院議員に對してお目にかかる。今後とも營業に關する話は役所に赴いて伺うことにしたい」と釘をさした。昭和十年秋の全国県會議員選舉に當り、飛島は内田邸を訪れ、選舉資金として少々差上げたいと、紙包みを出しかけたので即座に「御好意はありがたいがその必要はないから……」とこれを謝絶した。だが、翌年二月の衆議院總選舉でも同様なことを申込んで来たが、この時も明白に謝絶した。しかし昭和十一年春ごろから、東京市内の學校建築請負工事に端を発し、イモズル式に疑獄が拡大して、いつか鐵道工事關係にも嫌疑が及び、遂に平井工務局長の召喚という事態になった。

しかもある業者が、内田鉄相に對しても飛島から獻金があったと、出まかせの告白をしたので、俄然警視庁は色めきたち、あらゆる誹謗材料を新聞社に提供し鐵道疑獄をでっち上げた。この間に司直の手は、飛島から政友會代議士の難波清人に及び、十月初め警視庁に逮捕され身柄を拘束された。

同月三十一日、「再燃國鉄疑獄の頂上内田前鉄相けさ東京地方検事局へ出頭」という号外が出た。記事には（任意出頭の形式で麻布霞町の実兄窪田四郎氏邸より地方検事局に召喚され有安ら三検事の取調べを受けている。内田氏は贈賄被疑者として收容中の飛島文吉等から請託を受けたいという供述により一応の召喚を見たものである」と書かれていた。

◇

舵取り奮闘記

24

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「鉄道疑獄事件その二」

昭和十一年十月、信也は警視庁に収容され取調べを受けた。「鉄相在任中、何人からか金銭の贈与を受けた事実はないか」との質問に「何人よりも、如何なる性質の金も受け入れた事実なし」と突っぱねた。「ではその証拠があるか」の問いに「そういう証拠は明示できない、そんなことは不可能だ」と返答した。幾度か押問答を重ねた挙句、結局検事側が認めた聴取書に捺印を求めて来た。所がその終りに「私の不徳の致す所で世間を騒が

せ、誠に恐縮の至りです。何卒御寛大の御処置をお願いします」という文句がある。またここで押問答になり、検事が「これは不動文字なのだから捺印しろ」と強制するのを頑強に振り切りとうとうこの項を抹消させ、漸やく捺印の運びとなった。ここで検事は上司の指図をうけるから、暫待待てくれと中座して行ったが、間もなく検事が起訴の次第を告げ、そのまま市ヶ谷へ送られた。信也は収容生活を自伝で語っている。――起きる

と自分で床をたたんで、備付けの簞で室内を掃き、バケツに汲みである水で顔を洗う、平常のように冷水摩擦と体操をすます。風呂は週に二度いつも一番先に入れてくれたので非常に心地よかった。散髪は二週間に一度だったから、毎朝ヒゲを当っていた僕には、慣れるまでの間はすこぶる不快であった。厭だ

る。この時に僕は座布団から下りて、畳の上に正座し手を突いて礼をしなければならぬことだった。十一月四日収容以来、翌年二月十日まで九十九日間というもの、弁護士初め一切の面会人とも遮断されたのだから、娑婆の気の多い話好きの僕には、これに勝る淋しさはなかった。正月元日、差入れ弁当はお餅であったが、これは村田省蔵氏の差入れだったことを記憶する。こうして一月二十日の議会開会にも、とうとう間合わないことになったが、予審判事もこれを非常に同情してくれて、一月二十一日には浜田国松君の演説から、寺内陸相との一騎討ちの顛末、更にそれが導火線となって、広田内閣の総辞職も避け

がたい形勢にあることを話して聞かされた。私的の面で絶えず僕の心を痛ませたのは長らく病床にある九十五歳の老母の身の上であった。二月十日待望の保釈出所となるや、直ちに迎えに来た高橋前秘書官に、飛びつくようにその病状を聞くほどでもない、思わずほっと溜息をもらした。かくて家人出迎いのうちに九十九日ぶりでわが家へ入った。目方も一貫目ほど減ってはいしたが、元気なことは一同驚くばかりであった。――母ハツはその年の九月二十四日、九十七歳の天寿を全うした。青山斎場には会葬者が列をなし、記録では後藤新平の葬儀を第一に、老母は六番目の参列者数であったという。

◇

能取り奮闘記

(25)

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「鉄道疑獄事件その二」

予審中の取調べで、昭和十一年二月総選挙で飛島の政治資金献金申入れに対して、信也がこれを謝絶したことは明白となった。が、昭和十年秋の県会議員選挙で（飛島の現金持参での寄付申入れに信

接金に手を触れなかったが、難波を代理として收受せしめた。という嫌疑がかけられていることだった。だが信也はその当時難波とは会見した覚えがなかった。

——真相はこうだった。飛島が難波に渡した五万円は、難波が溜っていた赤坂各料亭の支払いに一部を当て、飛島に要望し、飛島は金五万円を難波に贈り、難波はこれを受領後、八月某日信也邸を訪ねてこの旨報告、該金員を数名の代議士に県会戦費用として分与した。つまり信也は直

接金に手を触れなかったが、難波を代理として收受せしめた。という嫌疑がかけられていることだった。だが信也はその当時難波とは会見した覚えがなかった。

れない。つまり貴下は内田の手足となつて、これを受領したものである。従つてこれを内田鉄相に報告承認を得ていないとすれば、詐欺横領という忌むらしい刑事問題を構成するわけであるが、もし単に内田の手足となり、五万円を受領して内田の承認を得ていた場合は、単なる贈賄補助という微罪にすぎないのだが……」と、極めて巧妙な誘導尋問をうけた。このため難波は事実を曲げて、八月某日内田を訪い五万円受領を報告、承認を求めた

と陳述してしまった。という飛んでもない偽証で、信也の身に思わざる禍いが及んで来たわけである。

世間を騒がせた事件は、司法当局の面目上、一審において（懲役三か月執行猶予一年）という判決が下された。だが信也はこれに対し即座に控訴した。爾来、事件発生して四ヵ年後の昭和十五年十月二十六日に無罪判決の言い渡しがあった。信也は判決要旨を聞いて、身に余る賞讃の辞に感激した。

一、内田信也は明朗、素直、剛毅、潤達、明敏、細心にして廉潔、正義感強く、短気潔癖にして一事をも、いやしくもせざる性格を有す。

二、右の如き性格を有する内田信也が、国務大臣の尊厳、鉄道省

の威信、一身の栄誉及政治的生命を賭し請負業者に対し、一度屈して再び伸びることなき膝を屈して迄、政治上の資金の贈与を受け、収賄と云うが如き破廉恥行為を為したることは信する能はず。

三、本件は犯罪の証明なきのみならず、反対証拠に依り公訴に係るが如き犯罪事実なかりしこと明かなり。

判決 主文

被告人等は何れも無罪

信也は国家に対し賠償を求めなかった。判決の際に吉田裁判長から「内田はスポーツマン・シップを以て終始した」という讃辞を受けた手前もさることながら、一日金五円他の値打ちを付けられるのも業腹だった。

◇

◇

龍取り奮闘記

(26)

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「盧溝橋事件が突発」

広田内閣の後に陸軍
大将・林銑十郎が総理
大臣になったが、昭和

は二度目の召命で辞退
する事は出来なかつ
た。

十二年三月の（食い逃
げ解散）で総選挙とな
った。信也の選挙民
は、鉄道事件の潔白を
確信し推薦候補の届け
出を行い選挙費用も自
分で賄った。四月の
衆議院選挙で信也は、
茨城一区で一万八千四
十三票を獲得しトップ
当選を果たした。林内
閣は野党の圧勝で五月
に総辞職する短命内閣
だった。元老西園寺は
後任として貴族院議長
の近衛文麿を内閣総理
大臣に推挙した。近衛

怒りの納まった近衛は
鎌倉山の別邸を信也に
貸した。そこで信也
は、他日の捲土重来を
期したというが、近衛
内閣に呼ばれる事は一
度もなかった。

昭和十二年七月、盧
溝橋事件が突発した。

信也は戦火の拡大する
のを見て、陸軍がいつ
もの通りの横車を押し
通すのではないかと危
惧した。急遽、軽井沢
から東上して、近衛首
相、馬場内相に日露開
戦前の伊藤博文の（戦
争は政府や軍部が起し
たのでは絶対勝てぬ。
国民の憤激遂に抑えが
なく、僕らが血祭りに
あげられたその時こそ、
初めて矢は絃を放
たれ、戦争は勝ち得る
ものだよ）という話を
そのまま伝えた。が、
信也の忠告も時代の流
れには叶わなかった。

近衛内閣は財界の池
田成彬を蔵相兼商相
に、陸軍の宇垣一成大
将を外相に据え、難局
突破を図ったが、宇垣
は板垣陸相と正面衝突
し外相の椅子を投げ出
した。近衛内閣は十三
年國家總動員法を制定
して戦時体制を強化し
たが、十四年一月総辞
職し、代って平沼騏
一郎内閣が発足した。し
かし八月、独ソ不可侵
条約締結という寝耳に
水の報をうけ、欧州の
情勢は「複雑怪奇」と
言って内閣は総辞職し
た。残暑の中、信也の
「待風荘」には近衛ら
数名が参集していた

が、独ソ条約の情報に
近衛は急遽帰京した。
平沼内閣の退陣に伴う
後続内閣につき、西園
寺公秘書の原田熊雄ら
と協議を重ねた。池田
成彬の推薦や廣田弘毅
の再出馬の意見も出た
が、後継は陸軍大将・
阿部信行が、かつて陸
下の軍事関係御進講の
任に当り陛下の覚えも
あり、國公より阿部大
將を後継首相に奏請し
て決着をみた。しかし
阿部内閣も翌十五年一
月総辞職、その後も海
軍大将の米内光政が首
相に就くという異常な
状態が続いた。その
頃、欧州戦線では独軍
は破竹の勢いで、五月
には難攻不落を謳われ
たマジノ・ラインを突
破し、六月十四日パリ
入城、同十七日仏軍は
遂にその軍門に下っ
た。

くだった。数カ月後、

近衛から出入り禁止を

国民の憤激遂に抑えが

なく、僕らが血祭りに

あげられたその時こそ、

◇

舵取り奮闘記

27

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「近衛文麿と松岡洋右」

昭和十五年は皇紀二千六百年で国を挙げて祝賀行事が催された。第二次世界大戦の勃発で、ドイツ軍の優勢は日本にも忽ち反映して、陸軍や右翼の日独同盟派は、得意げに羽振りをきかせ、既成政党に痛烈な批判を浴せた。民政党の斎藤隆夫は二月、反軍演説を行い、陸軍の怒りを買って衆議院議員を除名された。

信也は政党政治の危機に、三月の数日間、近衛と箱根湯本の「福住」別館に滞留し、ひそかに新政友組織につ

き会談した。この頃、政友会は久原派と中島派に分裂し、民政党と合わせて三党分立の形だった。そこで信也は最初に、町田民政党総裁の説得役となり、日本クラブで町田と会い、新党樹立に協力できないかと相談した。ところが町田は、民政党に深い愛着を抱いており同党も政友会も解体は行わず、むしろ両党で連盟を形成し、その上で近衛を総裁に担げば良いんじゃないか、という話になった。信也は赤坂の料亭「中川」に近

一派が、翼賛政治会を結成する下心からの反対を感じた。スタモンの末、各政党は解党し大政翼賛会が発足、政党政治は終焉を迎えるのである。七月、畑陸相の辞任後、陸軍が後任陸相を出し渋ったため、米内内閣は総辞職となった。

さて信也は最近、近衛にアプローチする元外交官の松岡洋右を警戒していた。松岡は廻船問屋の四男として誕生、十三歳で米国に渡りオレゴン大学を卒業、帰国後は明治大学在学中に外交官試験を首席で合格、外務省へ入った。義理の甥に岸信介、佐藤栄作がいる。ジュネーブで国際連盟脱退のパフォーマンスで名を上げた。やがて政友会を離党、政党解消運動を起した。その後、古巣の満鉄で

◇

◇

能取り奮闘記

(28)

内田信也物語

〈連載〉 宮本しげる

「日独伊三国同盟」

信也は米内閣瓦解後、次期内閣樹立に備え近衛と共に軽井沢にいた。その間にも松岡洋右はひそかに近衛を訪ねてきた。信也は松岡の政友会での行動から多分に危なかしい点があり、うっかり口車に乗らぬようにと、再三近衛に注意をしていた。だが、七月、近衛は第二次内閣を組閣するや、予想通り松岡を外務大臣に据えてしまった。近衛は自宅の「狹外荘」に吉田善吾（海相）東条英機（陸相）松岡洋右（外相）を招き国策の検討を始

めた。要するに日独伊枢軸の強化、対ソ関係の改善、新政治組織の結成など重要課題である。

八月、近衛首相は新体制声明を発表し年末には大政翼賛会が発足した。近衛は新組織に先立ち天皇陛下に内奏申し上げた所、陛下は「一国一党の政府を作ってはいけないよ」と仰せられたそうで、信也は陛下のご心配の通りと、政党を無視する動きに新党論者としてソップを向いた。

調は日々その濃度を増して行った。十一月二十四日元老西園寺公が長逝されたことは、国家のために一大損失といわねばならない。在世中、殆んど興津に引籠ってはおられたが、原田熊雄秘書を中心として、常に諸般の情報を取りまとめ、近衛公及び木戸侯を相談相手に政局に対処して来られた。しかし園公亡き後においては、この三羽鳥の間も従前の如く円満にはゆかず、原田君が園公の懐刀として政局に当たって縦横の動きを遂げたのも、犬養

政党内閣が倒れてから、斎藤、岡田、広田、林、近衛、阿部、米内内閣に至る間で、園公逝去後、木戸侯が内大臣になるに及んで、原田君の活躍を排撃する傾きすら窺われた。木戸内府は阿部大將を重臣会議に引入れて軍部とも気脈を通じ、日を経るに従って、は遂に、近衛公をも疎んずるようになった。

近衛公が木戸内府のそうした態度に、反発感じたのも必然の成り行きであった。九月二十七日、近衛内閣は平沼内閣以来の大懸案であった日独伊三国同盟を、松岡外相の強引な推進によって締結してしまった。もしこの内閣に予て僕の推挙して己まなかった山本五十六中將を海相としておいたならば、この三国同盟の如きは到底締結の運びをみるに至らなかったであろう。僕が同氏推挙に対して近衛公は「山本は敵が多いんでネー」と、これを受け容れなかったものであるが、この山本不起用と松岡起用こそが、日本破滅の大きな因をなしたと信ずる。

近衛公は公卿氣質であったから、三国同盟の如き心底では反対しても閣僚中に近衛公の後盾となつて強硬に反論する者がない場合は、つい押切るに委せるといった弱点があり、これが同公の最大欠点であった。と記されている。松岡外相は昭和十六年三月訪欧した。電光石火のようにヒットラー、ムッソリーニと会谈、モスクワではスターリンと会い、日ソ中立条約に調印するという独壇場だった。

◇

舵取り奮闘記

(29)

内田信也物語

〈連載〉 宮本しげる

「日米交渉難航」

三国同盟成立を境に
日米国交は、いよいよ
険悪の度を増してい
た。重要な資源を米
国に依存している我
国は戦争を回避しな
ければならない。近
衛は日米折衝につい
て、米国防務長官と
会見した。野村はワ
シントン駐在武官
時代に海軍次官であ
ったルーズベルトと
顔見知りである。松
岡はその事を知って
おり野村に白羽の矢
を当てたのである。
三月八日の会談を
皮切りにハルとの
交渉は六十回に及
び、大統領とは都合
十回の会談が行われ
た。四月、米側から
両国

了解案の提示があり、政府と統帥部との連絡会議が開かれた。米案を受諾することは米
国によって重慶を抑え
日中戦争を終結するこ
とになり、日米衝突も
当然回避できるので参
謀総長、軍令部長、陸
海両相も大いに賛意を
表した。その際、ドイ
ツに対し事前通告すべ
きと意見が出たが、近
衛は通告不要と判断し
た。しかし外務省は渡
欧中の松岡外相が、間
もなくソ連より帰国す
るから、両三日猶予せ
られたと手続を引き延
ばした。四月二十

二日、近衛は自ら立川飛行場に松岡外相を出迎えた。同夜直ちに連絡会議を開き、日米了解案を付議したが、松岡は訪欧成果についての気配をあげ、ドイツに対する信義上、米案に賛成致しかねると反対を示した。その後

の松岡修正案は米国の対日疑惑を更に深めるものだった。そういう中で、六月二十二日ドイツがソ連への攻撃を開始、欧州は新たな局面を迎えた。松岡には痛烈な一撃だった。松岡の独断専横もヒットラーの裏切りで、ひとり内閣から去ることになった。七月十六日、近衛邸で五相会議が行われ、東条陸相は「現在の政局に鑑み外相のポストは内閣の中核ともし、これが更迭を図ることは内閣を代えるのと同じだ。故に二たん総辞職を行うのが妥当と思う」と発言し総辞職に決定した。信也はこの事態に、近衛の本命再降下は予期できるが、その次の大命降下は到底あり得ないと感じた。それで近衛に（軍部はこの判断に基づき、近衛公に対する大命再降下、次いでその退陣があらんか、その次こそ当然軍部内閣を樹立し得る、といったことを予期しての発言ではなかったか）と伝えたが時すでに遅く、第三次近衛内閣の登場をみたのも束の間、十月には忽ち瓦解し、引続いて東条軍部内閣の出現をみたのは、何んとしても偶然とのみ言えぬ気がした。……結局、近衛の内閣投げ出しは軍部の思う壺となるのである。

◇

龍取り奮闘記

30

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「日米開戦近し」

七月、第三次近衛内閣が成立し、外相に豊田貞次郎大將が起用された。日米関係はこうした日本国内情勢を反映して、日々悪化の傾向を辿って行った。これを苦にした近衛は遂に自らホノルルに向かい、ルーズベルト大統領との会談を決意した。大統領は乗り気となつて三日間ぐらいアラスカで会談しようか、とまで野村大使に伝えてきたが、これまたハル長官の反対で立ちくされとなつてしまった。八月に入つて信也は、赤坂の中華料理

亭（あかね）で、ひそかに近衛と会談した。「総理は日米交渉推進に専ら浮身をやつしておられるが、陸軍は日中戦争をもてあまして、結局日米戦争にまで持つてゆき、自分の起した日中戦争の責任を、ウヤムヤにする腹ではなからうか。うっかりすると総理はひとり二階に上つて、今に梯子を外されることになるのではな

は次の事項知れるや」と記し、次いで、一、米国製鉄量一カ年八千万トン、英国……トン、日本四百五十万トン、ドイツ……トン、二、石油米国……トン、英国……トン、日独伊……トン、と簡潔に戦略物資の比較にならぬ生産高が書かれていた。近衛は「こんなわけでも戦争にはならぬ。ただ松岡がこれまでひとり開戦を強調していたから、陸海軍大臣とも協議して更迭した次第で、鈴木企画院総裁も充分この辺の事情を了承し、開戦反対論を唱えておるゆえ、大丈夫戦争にはならない」と、力をこめて信也の疑心氷解に努めた。

近衛は、日米戦争は必ず回避し得るものと確信していたが、日米了解事項の内容が漸次、陸海軍下層部に知れ渡るに及び、殊に松岡の内通によってこれを知った独伊が日米交渉阻害のため、苦肉の策を用いて下層部に呼びかけた結果は、先ず参謀本部などが主戦論に傾き初めて、遂に九月六日の御前会議となった。この会議において「帝国は自存自衛のため、対米・英戦争を辞せざる決意の下に、概ね十月下旬を目途として戦争準備を完了し、また十月上旬頃に至るもわが要求を貫徹し得る目算なき場合は、直ちに対米英開戦を決意す」という国策要綱を決議してしまつた。信也はこの会議こそは光輝ある我が国を滅亡の淵に追い込むものとひとり無然とした。

◇

◇

艦取り奮闘記

31

内田信也物語

〈連載〉 宮本しげる

「開戦回避に奔走」

信也は軍部の圧力に近衛が耐え切れないのではと、ひとり奮闘した。

十月十四日の定例閣議で東条陸相は「駐兵問題は陸軍の生命なり、その面目上絶対に譲れぬ」と突如、日米交渉打ち切りについて発言があった。これに対し海軍の態度は「海軍は和戦いずれとも首相の裁断に委ねる」という主張だった。この夜信也は近衛と、北支開発の質屋総裁を自邸へ招いていた。近衛は国鉄事件で無聊をかこっていた信也に、入閣の

話や外国使臣を勧めていたが、今回は質屋の後金として総裁に起用する話だった。午後六時、近衛は応接間に通るや否や「いやー、もろ今日の要談は必要がなくなりましたよ。内閣ももうお仕舞いですよ」と閣議の顛末を語りだした。これは一大事と、信也は翌朝岡田啓介大将の門を叩いて「大変なことになりました。実はずいぶんお騒がせしました。東条陸相が日米交渉打ち切りを提案したので、首相はその席で及川海相に、海軍は対米英戦争を可能と思うか

どうかを訊ねたのです。及川君が（不可能、自信なし）と答えてくれたは何んとか陸軍を抑えて戦争にならずに済むのに（総理の裁断にお任せする）とばかりで、軍事上の立場からの意見を少しも言わない。この分では閣議が纏まる目算はないと、近衛公は総辞職を決心している模様です。退陣すれば、次期内閣は当然開戦主義の内閣が生まれ、国家の前途はまことに深憂にたえません。この上は次の閣議において及川海相をして極力、日本海

軍は米英二国を相手として、勝利を得る見込みはないと確言せしめるほか、開戦回避の方途はないと信じます。このため海軍の大御所たる貴下と米内大将の二人から、及川君を説得することが絶対必要と思う」と力説した。

岡田大将は誠に同感だと、海軍の幹部を及川海相の所に行かせ、強力に対米英戦の不可能なる所以を次の閣議で明言させると約束した。信也が帰宅すると玄關傍から突然、私服憲兵が現われ「貴下は何の御用で角筈の岡田大将を訪ねられたのですか」と聞いて来た。信也はこの早業に驚いたが「僕は岡田さんとは年来の懇情で常々訪問しておるから、いちいち用談の内容を話すわけには参らぬ」と突放した。また、芝公園

水交社に小林大将、左近中将を呼んで米内大将を訪問するよう手筈を整えた。これだけではまだ安心できないとその足で鳥居坂の池田成彬を訪ね、辞職は思い止まるようにとの忠言を依頼した。信也は走り回ってやっと近衛邸へ着くと近衛は悲痛な口調で「実は昨夜あれから鈴木企画院総裁に会ったんだが、東条は最早これ以上閣議を開いても感情を激化するのみだから、閣議の再開を避けてこの際申し送って来た。内田君折角のご尽力だが今更何とも致し方なく、明日にも辞表を捧呈する考えです」これを聞いて信也は瞬間、呆然と立ちすくんでしまった。

◇

舵取り奮闘記

32

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「遂に戦争へ」

舵取り信也の必死の抵抗も戦争という巨大波には舵が利かなくなっていた。昭和十六年十月十八日、東条内閣が成立し戦争へ突入していった。十二月八日、開戦の日に信也は熱海の別邸でラジオを聴くと湯本の別荘にいた近衛へ電話し、小田原で落ち合って自動車で上京した。道中、近衛は「今朝はハワイを奇襲した筈だ。僕の在任中、山本五十六君を呼んで、日米戦についての意見を聞いた所、彼は初めの一年はどうにか保ちこたえられる

が、二年目からは全然勝算はない。故に軍人としては廟議一決し宣戦の天命降れば、ただ最善を尽してご奉公するのみで、湊川出陣と同じだ、と喋ってお

た。昭和十七年一月五日、近衛が熱海に滞在中、信也は急に思い立って粗宴を設けた。近衛文麿、宇垣一成、磯国昭、豊田貞次郎、結城豊太郎、桜内幸雄、山下亀三郎その他十名ほどが集まった。その時、近衛は次のような話を洩らした。「実は宮中の年賀式に参内した所、枢密顧問官の老人連中までが逆せ上って（近衛さん、惜しいことをしましたね、貴方にこの戦績の栄誉を担わせたかったのだが、いや実に惜し

いことをした」と、代るがわる同じような挨拶をされたのには、全く返事の仕様がなかったですヨ。あの老人連中までもやはりこのまま勝つと信じているのですか。来年の年賀式には何んと僕に挨拶することだろう」と、この戦機が一年続かぬことを断言した。

その後、日本軍の連戦連勝に勇ましい大本営の発表が相次いだ。六月のミッドウェー海戦は、空母の赤城、加賀、飛龍、蒼龍を失う致命的な大敗戦となった。だがその敗戦の実態は国民ばかりでなく、総理大臣、参謀総長すらも報されていなかった。信也は後年、東条内閣の農商相の時に東条へ「何故あのようにガダルカナルまで戦線を延ばしたのか」と訊ねると東条は「ミッドウェー海戦の敗亡を聞いたので永野修身軍令部総長に、予定の南方作戦はそのまま遂行して宜しきや、海軍の所見は如何？」と訊ねたところ、永野は（連合艦隊厳然なり以って守るに足る）と断言したので、そのまま遂行したわけである。ところが後からきけばミッドウェー敗戦は想像外に惨烈だったのだが、しかもなお空母を何隻失ったのか、今日に至るまで真相は明確に報されておらぬ」信也はこれを聞いて「首相に対して敗戦の真相を打明けぬのみか、かえって虚偽の報告を行い、それに基いて作戦行動に出でしめるというのであっては、戦争に負けるのは自明の理だ」と憤懣やる方なしだった。

◇

能取り奮闘記

33

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「近衛の終戦運動」

ミッドウェー海戦の惨敗を契機として十七年十一月ごろから次第に敗戦の色が濃厚になって来た。この頃近衛は痔疾を病んで、帝大病院に入院しており、信也は殆んど毎日見舞いかたがた雑談に出向いていた。近衛は病床に横たわりながらも、各方面の情報を集めて局面打開に苦慮したが、結局はお上の御聖断を促して、今のうちに戦争を終結せしめねばならぬと決意した。それを聞いた信也は「今ならば新嘉坡、香港もわが手中にある。

この質草のあるうちに早く家政整理を行わなければ、遂には母屋まで抵当に入れることになるから、病中ながらこの際は一日の猶予なく、速やかに終戦運動を起されたい」と懇願した。そこで二人は病院を脱け出し、新富町の天ぷら屋（清川）で久方振りに天ぷらを食べながら作戦を練った。近衛はすぐ独りで麻布の東久邇宮邸に伺候した。「戦局一刻の猶予も許さず、願わくば宮様よりお上に、この際速やかに和平を講ぜしめるよう言上のほ

どを……」と要請すると、同宮は「いやそれはダメです。重臣の諸君も開戦以来、単独拝謁はないそうだが、われわれ皇族もまた直宮以外は、単独拝謁は差し止めのだから、残念ながら言上の機会は得られない。これは直宮たる高松宮にお縋りする以外に途はあるまい」と断られた。それではと近衛は高輪の高松宮邸へ伺い、願いの趣旨を説明すると、高松宮は「上奏の前に東条首相と三人で協議しよう」と言われ、明けて十八年一月八日夕

刻、近衛、東条両者を夕飯にお召しになる段取りとなった。

当日、近衛は東条より三十分先着し、事前に殿下と協議していると、定刻に東条はオーブン・カーに乗って颯爽と参殿して来た。東条は座につくや否や、当夕の会食の意味を早くもそれを察して、いきなり「殿下、この節は和平を口にする者がままありますが……」と先手を打ち、意気軒昂として近衛の発言を封じてしまった。近衛も東条の意気込みに、なまじ発言してもなんの効果もなく、徒らに感情を昂らせるばかりと概して語らなかつた。その所へ妃殿下が入って来られ「総理はこの寒中にオーブン・カーでは、さぞかし寒いことでしょうネ」と、軽く皮肉を浴せら

れた。これですぐに意気すこぶる上つていた東条も「いやーたいして……」とばかり、話の腰も砕けたそうである。

昭和十八年の戦況は、二月ガダルカナル撤退が発表され、四月十八日、山本連合艦隊司令長官が、ブーゲンビル島上空で撃墜され戦死した。続いてアッツ島の将兵全員玉砕が報ぜられるなど悲報ももも至って全国民は暗澹たる思いに閉ざされた。

信也は山本五十六に好物のチーズを贈ったことがあるが、御札の書簡をもらっていた。「小生も大分敵もやっつけ部下も殺し候へば、そろそろ年貢の納め時と存候」十七年十月椰子の葉陰より、と記されていた。

◇

舵取り奮闘記

34

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「東条内閣の地方長官となる」

第八十二臨時議会は敗色いよいよ濃い十八年六月十三日に召集された。信也は山本元帥と生前親交のあった為、戦死者の慰霊演説を行った。(壇上に立つや万感胸に迫って、声涙こもも下り、真情を吐露して冥福を祈った。この時議席や傍聴席にも嗚咽の声が高まって、二十余年の議会生活中、演壇に立つこと数十回に及んだが、この演説くらい感激のルツボに浸ったのは初めての経験であった)と語った。

その頃信也は突然、

賀屋蔵相から東条首相の使いとして、夜中の訪問を受けた。「今日は貴方に叱られに来たのですが、ブン殴るのだけはやめて下さい」と前置きして「今度、国内を九ブロックに分け、各県及び地方通信局、鉄道局、海運局、財務局を併合して他方行政協議会を作ることになり、是非その会長になって頂きたい。これはもとより一喝されることがかと思いますが……。東条総理からも君国のため、まげて御承知願いたいとの懇請です」しかし官吏とな

を投げ出すべきであるから、そういうことに拘泥せず、あっさりと引受けて奉公することこそ国のためであり、また貴下のためでもあると信ずる」と、信也の出馬を勧めたが、岡田も同意見だった。

次の日使いがきて、東条首相が是非面会したいというので、自動車に乗せられて首相官邸に向かった。東条首相は初対面の信也へ熱心に就任説得に努め、もし入らないならば地方行政協議会も、ただ古手官僚の優待席と化し一向に行政刷新の実が挙がらない。引受けないなら協議会そのものも中止するとまで言った。信也は国家存亡の秋とこれを引き受けたが、条件として宮城県を中心とする東北六県の協議会を望んだ。

(鉄相在任中、東北地方冷害の救済のため六県を隈なく巡歴し、また続いて翌年には鉄道新線敷設の目的で、同様に六県を巡視するなど同地方とは深い因縁がある。それだけに多くの地方民とも、格別の親しみをお互いに感じ合い、地方事情の機微というか、そうしたものにも他の地方よりは精通していたから)と説明した。

信也のボン友山下亀三郎も近衛らと同志だったが、東条から海運の代表として内閣顧問に要請された。行政監察官として全国を飛び回ったが、東条は吹雪の北海道、青森を視察する山下へ(老人に風邪をひかせてはならぬが、ひとつ行ってもらえたら……)と気遣っている。

◇

舵取り奮闘記

(35)

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「地方長官で仙台へ着任」

昭和十八年七月、信也は初めて地方長官として仙台に着任した。任官の当日、ラジオ放送において「行政協議会長は各県知事を指揮命令するものではない。従来の如き各県割拠の弊を打破し、各県間の襖を取外すのが目的であって僕はその襖を取外した新世帯の家長となり、有無相通の相互融和を図るのが任務である。鉄道局、通信局、海運局と共に互いに胸襟を開いて、行政の円満な遂行を期する次第だ」という趣旨のことを述べた。この

その穴を通して、外部へ流れ出る仕組みだった。信也は毎日、各地役場に直接電話して供出の様子を聞いた。すると村長らは、直接知事官舎に供出状況を電話するので、信也は夜中何回となく叩き起こされ閉口した。

信也は毎月一回、首相官邸で催された行政協議会長会議において思い切った陸軍を痛撃した。いつでも辞めてやるという覚悟で、政府の施策を論難攻撃し、陸軍の横暴、無定見をも仮借なく指摘した。所が東条首相はそ

の攻撃を快く受け容れて、直ちにこれに対応し、かえって同調的な態度を示したという。舵取り信也は在任中、水を得た魚のように飛び跳ねた。当時塩釜港には冬季になると七十トン級鯉船が多数繋留されていた。信也はこれに着目して、遊休鯉船を南方に送り、石油積取作業に当らせようと考えた。

まず海軍省が大乗り気になって、往航に各離島へ食糧品を積んでくれるならと海軍所管の石油は無償供与するといいい、陸軍側は石油のみならず、あらゆる南方物資を無償供給するとい出した。直ちに漁業組合に向かって「五、六十トンの木造船に潜水艦も、高価な魚雷をぶっ放さぬ。また敵機の出現もまれで、こんな小さなもの

を相手にしている暇はない。一挺ずつに機銃を備え十隻の挺隊を組んでゆけば、決して危険はないから……」と説得した。十八年十一月、信也は出発に当って塩釜神社に乗組員を集め、盛大に船出を祝福した。塩釜港を六十隻の鯉船団が勇ましく出航した。果たして翌十九年二月に、幸い一隻の事故もなく、無事目的を上げて帰着した。この結果、漁業用油三千トンを得て、漁業者は莫大な収穫をあげ、ひいては国民食糧のために、大きな貢献を果たした。また、信也は塩釜港の海陸一貫輸送の統制でもめていた所を、宮城県内政部長に業者の統合を進めさせ、新会社・塩釜港運送(株)を設立した。

◇

舵取り奮闘記

36

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「農商大臣に就任」

昭和十九年になると、戦局はますます悪化して行った。二月、東条は省庁再編で総理大臣、陸軍大臣、軍需大臣を兼任し独裁体制を敷いた。信也は内閣改造で何となく入閣の予感があった。近衛や岡田大将も「重臣たちは単独拝謁を許されず上奏の機会も殆んどない。君は僕らの身代り」と思って是非入閣し一日も早く平和を克復するよう努力してくれ。東条内閣が頑張るようなら、内部から内閣を倒して国家を救って貰いたい」と彼の入閣を望んだ。信也は上京中に東条から呼び出しがあった。「貴下には是非農商大臣を引受けて頂きたい」だが運輸通信大臣を要請されると思った信也は「農商省には先に農林育ちの石黒忠篤君、井野碩哉君に次いで三度も農相を歴任した山崎達之輔君がいるのに、何故にこの玄人の山崎君に代えるに、素人の私を以てするののか」と、押問答になったが「玄人というのは定石を唱えるもので玄人が三代続けば大方定石は打ち尽している。戦局は今や重大性を加えておるが、この戦争もはや定石で打ち勝つことはできない。貴下が東北において示された奇才と熱意によってのみ、わが国民の食糧問題も解決されると確信する。国家国民のため貴下の奮起せられんことをお願いする」東条はこう言っ二度ほど額をテールにつけた。これには信也も胸を打たれ、一語も発することが出来なかった。同夜、親任の辞令を受けた信也は、翌日農商省に初登庁するや、昨夜の石渡蔵相との肥料助成金増額承認の話を伝えたので、幹部一同はこの吉報に驚いたが新大臣を歓迎した。信也は又しても我が国の舵取りに乗り出した。先ずは食糧逼迫の折でも将来を考え学童給食を断行、幼児にも配給量を増やした。また外地米六百萬石の海上輸送に取組んだが、二百八十万トンの船腹が必要だった。だが撃沈する船は毎月十七万トンを超えた。政府は標準型鋼鉄船としてE型千五百トン造ったが、七ノット程度の船で鉄鉱石を運び、その鉄鉱石で更に同型の船を造って雪だるま式に船腹を増やす方策だったが、冬季の荒天で運航できないことまで計算してなかった。信也は全然船舶に経験のない者が物動計画を描き、戦争をやっても勝てるわけはない、と苦言を呈していた。山下汽船の山下亀三郎もこれを心細がって書記官長に対し「海上輸送計画については、船に詳しい内田農商相を加えて協議したらよいではないか」と申入れたが、採用にならなかった。

戦況は日増しに不利を伝え大本営が絶対確保すると決議したサイパン島も、六月十五日米軍が上陸した。首相は閣議で米軍撃退を確言したが、六月十八日より三日間に亘って行われた、マリアナ沖海戦は、空母の大鵬、翔鶴、飛鷹を失い、味方艦上機もその八割を喪失するという惨敗を喫した。日本防衛戦はここに潰滅して、その後、わが国はB二十九の威力圏下に陥った。

◇

舵取り奮闘記

37

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「東条内閣倒れる」

東条首相は七月サイパン島陥落の後閣議で「太平洋ばかりが戦場ではない。遠くインパール方面におけるわが軍の進出をみれば、サイパンの亡矢あえて落胆するに当らぬ」と負け惜しみを言った。

だがインパールの攻略も実際は英軍の猛烈な反攻によって、苦戦の様相を呈しつつあった。かくて東条内閣は、軍事上にはサイパンを取られ、内政的には海相、軍令部長の更迭を余議なくされ、翼政会からは重臣の入閣を強要され、しかも重

臣層からは排撃を喰って、ここに進退窮まった。東条は海相更迭とともに、内閣改造を企図して、国務大臣岸信介の退任を迫っていたが、岸は辞表提出を拒絶した。岸に横になら

れては陣頭指揮の東条も如何ともすることが出来ず、重臣会談の翌朝参内して天皇に辞意を願ひ出て、これを閣議に報告し一同辞表を捧呈した。

信也は非開戦論者だったので初めは東条を面白く思っていなかった。が、行政協議会長時代から東条内閣へ入

って、東条のハキハキした所や約束を重んずる所など、個人としては真に好人物で憎みよ

うのない人であることに気が付いた。内閣総辞職後、皇居（千草の間）の慰労会で陛下と雑談の折、五島慶太運輸通信相が「私は玉川の故田健治郎旧邸に住んでおりま

すが、そこに陛下皇太子時代のお手植えの松がありまして今では亭々と生い茂っております」と申上げると陛下は「では東条の家の近所かい？」とお尋ねになった。とっさに信也

は（陛下は東条が玉川に豪邸を建てたと新聞

ったという。

ザタになったことをご存知と思ひ、「私は先ごろ赴任の挨拶に初めて問題の東条邸を訪ねてみました。自動車を

後方に坐って信也の話にきき耳を立てていた東条は、退出のとき豊明殿の廊下を歩きながら「内田さん、一つ私の家を百万円ぐらいで買い取って下さるか」と、笑いながら軽

鍋島伯爵邸で、次に飛び込んだのは某実業家の屋敷で、漸く探し当てて入ってみると、これはまた意外や噂には及びもつかぬ粗末なものでした。せいぜい秘書官官舎程度だったの

でこれには驚き入りました。東条も世間から何十万という値をつけられた時すかさずに、ではその値で買ってくれと、やればよかったのに東条も拔かりました」と座興的に言上した。これには陛下も同席の三笠宮殿下も、大いにお笑いになって、東条大邸宅問題もようやく実態がお解りにな

ったという。後方に坐って信也の話にきき耳を立てていた東条は、退出のとき豊明殿の廊下を歩きながら「内田さん、一つ私の家を百万円ぐらいで買い取って下さるか」と、笑いながら軽

口を投げかけたが、ふとその顔をみると眼鏡の下には涙が一杯に溢れていた。信也は、自分が近衛、岡田系として敵視していたが三顧の礼をもって入閣を要請し、わがまま一杯の自分に、遠慮がちな態度で接してくれ、思いのままに仕事をさせてくれた。その情誼に対し、幾分個人的に酬いることができ、内心慰めるところがあった。だがこの日を限りに東条とは会うことは無かった。

◇

◇

舵取り奮闘記

(38)

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「貴族院議員の講和運動」

昭和十九年七月、小磯、米内連繋内閣が発足すると、信也は小磯首相から勅選議員の話があった。貴族院とは不似合であることは判っていたが、次期の衆議院選挙には再び古巣へ戻れると思い、華族さんと同席してみることに決めた。所が想像以上に退屈極まるもので、丁度ぬるま湯の風呂に入っているのと同然で、食堂に行つて彼らと飯を食い話を交す気も起らず、昼食はいつも衆議院でやるという始末だった。駐ソ大使で後輩の佐藤尚武が

これを聞いて「貴族院議員とは柄にもない、持味を無くしてしまうから直ぐやめろ」と言つて来た。

昭和二十年一月九日には米軍が比島に上陸し、信也の焦燥感もいよいよ高まつてきた。一刻も早く講和態勢の確立を図るため、星ヶ岡茶寮に近衛、岡田、吉田茂、前蔵相・賀屋も加えて一夕懇談会を催した。その後、近衛は麹町の吉田邸で上奏案文の起草に当った。二月、近衛の単独拝謁の模様を信也は吉田邸で待った。近衛はニコ

ニコしながら、草案を片手に帰つて来て「今日は藤田侍従長と木戸が侍立して、思い切つて腹藏のない所を申上げて来ましたよ。上奏は一時間以上に及んだが、陛下からも熱心な御下問があった」と、非常に満足の様子であった。しかし近衛上奏が今までになく強硬な講和促進論だったので憲兵隊が動き出した。四月、吉田茂が東京憲兵隊に抑留され、原田熊雄も大磯において数日間に至る病床訊問を受けることになった。後年、斎藤憲兵中尉は

こう語っている。「吉田氏は、講和促進論は国家の存立を図るための僕の信念なんだ、と述べて少しも悪びれず、実に堂々たる答弁ぶりだ。国士の風格まさに充分、まことに敬服にたえなかった」吉田は四十日ほどの拘留で釈放され、無事大磯に帰宅した。信也は吉田釈放を聞いて直ぐに大磯へ駆けつけようと思ったが、憲兵の目を気にして行けなかった。だが、近衛はすぐさま自動車で大磯に赴き、吉田、原田、樺山らの関係者を歴訪して帰つて来たが「吉田君も非常に元気だったよ」と語り、この時は

「君、飛行機を一台工面出来ないだろうか。僕は陛下の御親書を携えて、比島の米軍機で米国に渡つてルーズベルト大統領と、講和の話を進めたい」と祖国救済の悲願は切ないものだった。

◇

◇

龍取り奮闘記

39

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「終戦を迎える」

講和態勢は遅々たる歩みを示しながら、昭和二十年夏を迎えた。中々神興を上げなかった鈴木内閣は、帝国海軍は名実ともに全滅し、盟邦ドイツが無条件降伏するといった最後の様相をみて、漸やく講和促進への本腰を入れることになった。

七月十二日突然、陛下は近衛を呼んだ。「このうえ戦争を続けるのは、ただ国民の惨苦を増すのみである。遺憾ではあるが一刻も早く講和しなければならぬ。その段取りを運ぶため近衛、お前はソ

連に渡って折衝してくれ」との御下命を拝受した近衛は、信也に随行者の八選を相談、主席随員を賀屋、同盟通信の松本重治などが選ばれた。中ソ大使の佐藤は「遅い！遅すぎ」と嘆いたがモロトフ外相に近衛派遣を懇願した。しかしこの要請も七月二十六日のボツダム宣言で幻となった。万策尽きた近衛は湯河原に、信也も熱海へとそれぞれ籠った。

信也は日々、湯河原に往復することになったが、極秘裡に国体を変革せざる範囲における無条件降伏を申出たことを承知した。十二日、信也は湯河原駅に降りてみると、駅前広場で多数の青年が、裸体以後鉢巻で竹槍の突撃練習をしていた。このように何にも知らない国民の純真な姿に接しては、涙が溢れ出て致し方なかったという。

遂に我が国は、八月十五日正午の玉音放送で戦争終結となった。信也は熱海で重光葵外相とともに直立不動、謹んでこれを拝聴した。この期に及んではさすがにいうべき言葉もなく、ただ潸然と涙にくれた。二週間後、重光は東京湾の米艦ミズリー号で降伏文書に調印した。この御放送とともに功罪相半ばした鈴木内閣は、予定通り退却して八月十七日東久彌宮殿下に大命が降下した。御内命によって、近衛が補佐役的な國務大臣として入閣した。近衛は開戦前から陸軍と反対的な立場に起ったのみか、殊に無条件降伏を推進したということから、身辺には多分に危険が感ぜられていた。それで自動車も自家用を使用せず警視庁の名札を下けた車を用い、居所も時々変更した。刺客の来襲を避けて十日ばかり、信也の甥、大蔵事務官石野信一宅に泊ったこともあった。このころ戦犯容疑者が続々と指名されて信也の身

上を心配してくれる者もあった。戦争中、役人をやろうと大臣をやるうと、戦犯容疑者として留置されるはずはないと言っていたが、ある日、市ヶ谷法廷の検事から呼び出しがやって来た。「貴下は満鉄総裁であつたろう？」と訊ねられ、これは内田康哉伯の間違いだなと気づいた信也は「僕は伯爵ではない、内田伯爵は昭和八年に死亡している」と答えたと「それはとんだ手数をかけてすまなかったが、手数ついでに帰りがてら、内田伯に伝言して貰いたい」ときなので、一同大笑いとなつてしまった。東久彌宮内閣は僅か二カ月の短命で、十月五日総辞職をとげ九日、幣原喜重郎内閣の組閣をみた。

◇

能取り奮闘記

(40)

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「近衛公の自殺」

十二月六日、信也は朝のラジオで、戦犯容疑者として近衛公の名を耳にした。自伝によると――十五日則ち自殺の前日、近衛公から電話で呼び出しを受け午前十時狭外苑を訪ねた所、先客がいないのに三十分程待たせた後、きちんと褥をつけて応接間に現われて来た。「昨年の痔の手術後まだ完全に治癒していないそうだし、條虫もまだ駆除しておられぬそうだから、一時入院してその辺の治療を先にされたらどうです」と勧める。「実は

いかと思う」この答えに「いや全く僕は従来の境遇からでもあろうが、この間、新聞写真で梨本宮殿下その他の名士諸君が、大風呂敷を背負って収容所入りする姿を見て、僕はとてもこの屈辱に堪えられないと思った」と語った。今にして思えば、この時同公の胸中を去来するものは（入院か、自殺か）以外の何にもものでも無かったのである。対談一時間にして辞した僕を、玄関まで送り出されたその姿は、今も僕の脳に

六日午前二時頃、同公は入浴後独り日本間の寢室に入り、帝大在学中の次男道隆君を呼び寄せ、床の上で辞世と覚しき一節を口述筆記せしめ、更に一ぱいの冷水を取り寄せて寝についたが、思えばこれが服毒用の水だったのだ。翌朝令夫人が部屋に入って初めて、同公の自殺に気づき大騒ぎとなった。遺骸は何ら苦悶の表情もなく、深い睡りに陥っているかの如くであった。家人は夜中に公の寢室に当る方でカタンという物音を聞いたという、それこそは青酸カリを飲み下してコップを盆の上に置いた音、否、同公の多彩な生涯に打たれた最後の終止符だったであろう。と記されている。

昭和二十一年正月、信也はGHQの公職追放を受け、早速貴族院に辞表を出し正真正銘、無官無職の身となった。時は過ぎ昭和二十五年、信也は日本鋼管造船所で協和丸の進水式に出席した。山縣勝見船主協会々長は「いまこの前におられる内田先生が、かつて海運界において発案された……」云々と述べると、周りの人は「おい、内田信也はまだ生きてるのかい」とやっていた。やがて信也は乾杯の音頭をとり万歳を絶叫した。すると来賓たちは「どうして内田はえらい元気だな、あれじゃ中々死にそうもないぞ」と語り合った。信也は大いに然り、この調子ではまだまだ死にそうには思えない。と自伝「風雪五十年」を締め括っている。

◇

舵取り奮闘記

(41)

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「海運業へ復帰」

昭和二十四年、信也は七十歳を迎え明治海運の取締役会長に返り咲いた。翌年八月には公職追放が解除となり、再び政界への復帰を目指した。月曜から金曜は船屋として奮闘、土日は茨城の選挙区で時局講演する強行軍だった。昭和二十七年の総選挙で自由党から立候補、果たして茨城県第一区でトップ当選した。更に翌年の吉田首相「バカヤロー解散」で総選挙になったが、信也は後援者の高齢化の影響もあってか最下位の当選だった。

昭和二十四年、信也は七十歳を迎え明治海運の取締役会長に返り咲いた。翌年八月には公職追放が解除となり、再び政界への復帰を目指した。月曜から金曜は船屋として奮闘、土日は茨城の選挙区で時局講演する強行軍だった。昭和二十七年の総選挙で自由党から立候補、果たして茨城県第一区でトップ当選した。更に翌年の吉田首相「バカヤロー解散」で総選挙になったが、信也は後援者の高齢化の影響もあってか最下位の当選だった。

竣工式で「明治海運は将来新造船を十隻造るから諸君も希望をもつて船務に奨励するように」と気船を上げた。その後、公言通り貨物船を次々建造し三井船舶へ用船した。また石油需要を見越しタンカーにも手を広げた。当時の東亜燃料工業社長は中原延平で、兄、窪田四郎の富士製紙時代の門下生だった。東燃は乾汽船など六社の船を連続航海用船していたが、信也は初めて定期用船という形で契約を結んだ。

第八次計画造船「明泰丸」が就航したのは昭和二十八年九月だった。信也は試運転中に機関に異常があると引渡しを十五日遅らせた。中原は（荷主に対するサービス精神と厳しい経営姿勢の表れ）と感心した。その後東燃は「石油業とは輸送業である」と東燃タンカーを創立、自社船を二隻建造した。信也は「明哲丸」「明扇丸」を建造し東燃との互惠関係を確立した。信也は船価交渉にも首を突っ込んだ。三井造船の山下勇は若い頃信也に「初商売ですから祝儀を下さい」、「いくらほしい」と言われ「五百万円お願いします」と答えると「いいだろう、やろう」と、明哲丸の船価二十三億三千万円に五百万円を上乗せした。だが子会社の藤永田造船では猛烈な船価交渉で、佐々木副社長は「内田さん、そんなに値切るなら注文はいりません」と言う

と「なに！お前の顔なぞ見たくない、帰れ帰れ、二度と来るな」と毎回、言い合ったという。

舵取り奮闘記

42

内田信也物語

〈連載〉宮本しげる

「大往生」(最終回)

信也は昭和三十七年四月、旧制水戸高等学校跡の「記念碑」除幕式に出席した。信也は酒席でよく水高の自慢話をした「俺の一生の最高の事業は水戸高校を創ったことだ」第一回生の江戸英雄(三井不動産社長)は来賓の信也を見て「感激家の内田老が頻りにハンケチを眼にあてておられたのが印象的だった」と述懐している。その記念碑に寮歌の第一節が刻んである。

時乾坤に移ろひて
春秋老いぬ数百年 古

き歴史を秘めて立つ
水府城頭名に高き 常
磐の園の草分けて 今
年理想の花咲きぬ
作詞は一回生の窪田敏夫、作曲は近衛文麿の弟、近衛秀麿である。江戸英雄はその後、信也のボン友・山下亀三郎が創設した桐朋学園に係わり歴代の理事長になっている。政治的野心の無くな

た。「デリバリーの前
に、俺はブリッジに立つ」と信也の要請に三井造船はゴンドラを用意しクレーンで釣り上げた。この時、同乗したのは兄窪田四郎の後継者、三井船舶から

は必ず配当します」と答えると「それは良いことだが、君のオヤジは一生懸命復配しようとして毎日生きている。君と一緒に頑張って頑張り、親父の寿命を縮める。復配してごらん、オヤジさんばったりだよ」と面白い親孝行を教えてくれた。――勇は東京帝大工学部卒業後、三井船舶で乗船実習中に信也の勧めで海軍現役技術科士官に志願した。その後、召集令状が来て海軍艦政本部に配属された。銚子で特攻舟艇「震洋」を建造中に終戦となった。三井船舶に復帰後「船舶通風の研究」で博士号を取得している。八十九歳になった

次官から神戸銀行頭取になった事を喜んだ。昭和四十五年暮れ、信也の病状は一層悪くなった。勇夫妻は徹夜の看病をした。勇の嫁に信也は「お前たち、看病するのも大変だろうけど、生きていく方も大変なんだよ」と本音を漏らした。看護婦の打つカンフル注射に反応を示したが、年が明け一月七日、信也は、家族たちに見守られながら静かに息を引き取った。享年九十一歳の大往生だった。勲一等旭日大綬章を授かり、天皇陛下より祭料を賜った。

嗚呼、風雲児内田信也は、波乱万丈の大波を乗り切り、やがて黄泉の海へと舵をすすめた。

完